

徳富蘇峰とアメリカ人の交流

—書簡を手がかりに—

澤田次郎

The Interchange Between Tokutomi Sohō and Americans

SAWADA, Jiro

Tokutomi Sohō(1863-1957) is one of the most popular journalists in modern Japan. During the Pacific War, he insisted that the Japanese had to fight and destroy America with a firm conviction of sure victory. Such a view had a great influence on the people; therefore, Sohō is still well-known as an anti-American opinion leader today. However, he had been rather pro-American in the first half of his life. There remain quite a few letters between Sohō and his American acquaintances. We can know his other feelings about the U.S. through this correspondence.

This paper sets out to investigate the exchange between Sohō and three Americans in the Meiji era: Edwin L. Godkin, Charles E. Norton, and George Kennan. Although a large number of researchers have studied Sohō's thoughts and actions, little is known about his contact with Americans. Therefore, I would like to examine their friendships and consider their influence on Sohō's view of America.

First, Edwin L. Godkin (1831-1902) was a magazine and newspaper writer. As an editor-in-chief, he founded the New York *Nation* in 1865. The *Nation*, which discussed the political and economic issues of the day, was supported by many intellectual readers, such as James Bryce and the young Woodrow Wilson. In the New York *Evening Post* and its weekly edition, the *Nation*, Godkin insisted on liberalism and anti-imperialism. Sohō, who had subscribed to the *Nation* in his youth, had accepted its ideas and later founded the magazine named *Kokumin no tomo*(*The Nation's Friend*). Thinking back to his youth, he wrote Godkin a letter dated 1893, which is now stored at Harvard University's Houghton Library. This letter shows Sohō's deep respect and affection for Godkin. In those days it seemed to Sohō that Godkin acted as a role model for journalism and self-realization.

Second, Charles E. Norton (1827-1908) was a scholar of European art in the Middle Ages and the Renaissance. Furthermore, having a lot of experience in journalism, he played an active part in helping Godkin to start the *Nation*. In 1897, when Norton was a professor of art history at Harvard, Sohō visited his house in Cambridge, Massachusetts. They were impressed with each other; Sohō appreciated the respectable Puritanism behind Norton, while, Norton found Sohō a man of refined taste. From that time, both men exchanged several letters, the most important of which are stored at the Tokutomi Sohō Memorial Museum in Ninomiya, Kanagawa Prefecture. The letters from Norton say that he was very disappointed with the Spanish-American War of 1898. He thought that the war

betrayed American ideals and expedited its expansionism. Using the same argument, Sohō blamed American diplomacy in his later years. He respected Norton as an embodiment of a forgotten puritanical and idealistic America.

Third, George Kennan (1845-1924) was a journalist and Russian specialist. Investigating the Siberian exile system from the 1880's to the 90's, Kennan saw first-hand the wretched conditions of political exiles. After that, supporting the Russian revolutionary movement, he engaged in a war of words against the Tsarist Government. In 1904, when the Russo-Japanese War broke out, he served as a war correspondent for the *Outlook* magazine in Japan. His articles cheered Japan as a defender of modern civilization, and in contrast, denounced Russia as a barbaric invader. Kennan's papers, which are in the Manuscript Division, Library of Congress, show that Sohō met Kennan in Japan and promised to take him to see Matsukata Masayoshi, who was one of Japan's most influential elder statesmen. In addition, Sohō's subordinate provided information for Kennan's writing. On the other hand, Sohō corrected an error in Kennan's article about the Hibiya Incendiary Affair in 1905. From the viewpoint of Sohō, Kennan seemed to be a favorable pro-Japanese American and valuable in the struggle against Tsarist Russia.

In conclusion, these three Americans were close to Sohō's heart. They were the mirrors reflecting his favorable image of America. After the Russo-Japanese War, Sohō came to dislike America in response to the development of the Anti-Japanese Movement in California. Nevertheless, his heartwarming memories of his American acquaintances never vanished. He expressed his affection for the U.S. even just before the Pacific War, though it was only slight. We can see that his love of America was derived from his experiences with these Americans.

はじめに

徳富蘇峰（1863～1957）は近代日本を代表するジャーナリスト、歴史家として知られている。明治中期から昭和戦後の六十年以上にわたって、蘇峰は日米関係やアメリカ外交につき主張を展開し続けたが、そうした言論の裏づけとなる知識の源はどこにあったのだろうか。無類の読書家であったかれは、国内はもとよりイギリス、アメリカの書籍や新聞、雑誌を精力的に渉猟している。それらの洋書の主なものは現在、お茶の水図書館成篁堂文庫に保存されており、書き込みを検証することによって蘇峰がアメリカの知識を受容していく過程を辿ることができる²。

しかしながら蘇峰の情報源は、内外で発行された出版物だけにとどまらない。当時の知識人としては相当の程度で、アメリカ人と接触している。よく知られているように、熊本洋学校時代（明治5年、8～9年）にリロイ・L・ジェーンズ（Leroy Lansing Janes）、同志社英学校時代（明治9～13年）にはドワイト・W・ラーネッド（Dwight Whitney Learned）やジェローム・D・デイヴィス（Jerome Dean Davis）等のアメリカ人教師、宣教師から学んでおり、以後もアメリカ人との関係は絶えなかった³。そのため徳富蘇峰記念館（神奈川県二宮町）には、

アメリカ人と確認される人物から蘇峰に宛てた書簡が少なからず残されている。⁴また蘇峰はヨーロッパ巡遊からの帰途、短期間ではあるがアメリカを一度訪問しており、明治30年(1897)5月から6月末に帰国するまでの間、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、サンフランシスコを回り、有識者とも会っている。⁵以上のことから蘇峰の情報源の第二として、アメリカ人との交流をあげることができよう。

日米戦争中、蘇峰は日本文学報国会と大日本言論報国会の会長を兼任し、論壇の重鎮として米英打倒を高唱したため、今日では反米主義者の代表例と考えられがちである。しかし蘇峰とアメリカ人が交わした書簡を検討すると、蘇峰すなわち反米という単純な図式は成り立たず、かれのアメリカに対する様々な思いを読み取ることができる。また蘇峰が自己の対米観を形成する上で、現実のアメリカ人から影響を受けた形跡がうかがえる。

これまで、そうした書簡は管見の及ぶ限り、ほとんど省みられることがなかった。本稿ではそれらのうち重要なものを選び、その内容を検証することによって、蘇峰にとっての「アメリカ」とはどのような存在であったのかを考えてみたい。とり上げるアメリカ人については、蘇峰が後年まで記憶にとどめ、強い印象を受けたと考えられる人物に限定した。すなわち、エドウィン・L・ゴドキン (Edwin Lawrence Godkin)、チャールズ・E・ノートン (Charles Eliot Norton)、ジョージ・ケナン (George Kennan) の三名である。なお、ここで紹介する書簡は内外の文書館に所蔵され、必ずしも容易に閲覧できるものではなく、しかも手書きの書体を解読するのに時間を要する個所が多々あるため、できるだけ全文を引用するようつとめた。⁶

1 エドウィン・L・ゴドキン

明治20年(1887)、民友社を設立した蘇峰は総合雑誌『国民之友』を創刊した。同誌は列強主導の国際社会の中で日本が誇りある地位をまっとうすることを願いつつ、政治外交、経済、社会問題から海外事情、文学にいたるまで、幅広く論評し、⁷明治中期の青年知識層に新鮮な衝撃と強い影響をもたらしたことはすでに知られている通りである。⁸この『国民之友』を構想するにあたって、蘇峰がアメリカの評論雑誌『ネイション』(Nation)をモデルにしたことは知られている。自伝の中でかれは、まず『ネイション』を愛読した大江義塾時代(明治15~19年)を次のように振り返る。⁹

…予を益したのは、京都同志社教授ラーネッド氏に依つて、米国から『ネーション』…を購読したる事だ。『ネーション』は当時が最も盛んなる時で、その中の特別寄書は、特に予が愛読する所であつた。特別寄書は、米国以外の諸大家から寄するものにて、その中にはブライス、ダイシーその他英国、仏国の有名なる大家が揃うてゐた。又たその新聞の社説及び評論は、ゴッドキン、若しくはギャリソンの手になつたものらしく、頗る卓越してゐた。

次に、その後『ネイション』からヒントを得て『国民之友』を生み出した点につき以下の

ようにいう。¹⁰

…何故に『国民之友』と名付けた乎と云へば、予は少壮以来米国の『ネーション』(The Nation) 雑誌を愛読し、ネーションといふ字が頭の中に刻みつけられてゐたから、遂に斯く称したのである。…

…〔『国民之友』の〕体裁などは半ば予が創意になり、半ば外国雑誌のそれを応用したる事もあつた。唯だ特別寄書欄を設くるの一事は、米国のネーション雑誌に、スペシャル・コレスポネンス (The Special Correspondence) として、欧羅巴、就中英国諸大家の寄書を掲げたから、それを其儘特別寄書と訳し、而して当時著名なる諸大家の作を、悉く吾が特別寄書欄の中に網羅せんと努めたのであつた。

若き日の蘇峰は同志社のラーネッドを通じて『ネーション』を購読し、『国民之友』のタイトルや特別寄書欄は『ネーション』から示唆を受けたというのである。¹¹ しかも同誌の編集に関与したエドウィン・L・ゴドキン、ウエンデル・P・ギャリソン (Wendell Phillips Garrison) をはじめ、ヨーロッパから寄稿したイギリスの歴史家、政治家ジェームズ・ブライス (James Bryce)、アルバート・V・ダイシー (Albert V. Dicey) の名は、後々までかれの記憶の中にあつた。このうち『ネーション』を語る上でもっとも重要な人物は、1865年から1890年にかけて教養あるアメリカ人の内政、外交評論家のうちもっとも有能で影響力があつたと評価されるゴドキンである。¹² 蘇峰との接点を述べる前に、まずゴドキンの経歴を見ておこう。¹³

ゴドキンは1831年、アイルランドのダブリン近郊モインに生まれた。父親は会衆派教会の牧師であつたが、イギリス支配に抵抗するアイルランド青年党運動を支持して聖職を去り、言論界に転じた。この父から、ゴドキンは闘争的な情熱とジャーナリズムへの強い関心を受け継いだ。¹⁴ ベルファストのクイーンズカレッジに進学したゴドキンは、イギリス自由思想を吸収するかたわら、経済学 (political economy) の講義でマンチェスター学派の自由貿易主義を学び、将来、レッセフェールが全世界で勝利を取めることを確信する。大学卒業後、ロンドンに出たかれはミドルテンブル法学院で法律を学んだが、父親と同じくジャーナリズムに自己の本領を見出し、1854年から56年のクリミア戦争ではロンドンの『デイリー・ニューズ』(Daily News) 特派員として戦場をめぐる。戦後、一旦ロンドンに戻ったかれは、イギリス社会の壁を越えることができず、イングランドに愛憎並存の感情を抱いたままアイルランドに帰る。1856年、25歳のゴドキンは閉塞感と将来への不安からアメリカに新天地を求め、アングロアイリッシュの移民として渡米した。当時のイギリス人は主にアレクシス・ド・トクヴィル (Alexis de Tocqueville) の著作を通じてアメリカを知ったが、ゴドキンも同様であり、トクヴィルからアメリカの奴隷制度に関する知識を得ていたかれは、到着早々に南部を旅しながらこの問題を考えさせられる。これは同じくトクヴィルの著書を読んでアメリカのデモクラシーに肯定的なイメージを抱く一方、奴隷制に不快感をもったと考えられる蘇峰と重なる面がある。¹⁵ その後、ニューヨークで弁護士の資格を得たゴドキンは、言論人としての欲求がやみがたく、『ニューヨーク・タイムズ』(New York Times) や『ニッカーボッカー』

(*Knickerbocker*) に寄稿し、アメリカでの活動基盤を築いていった。¹⁶

南北戦争期、ゴドキンは北部に同情的であった。1865年の戦争終了間際、奴隷制反対論者の間で『ネイション』と題した週刊誌発行の準備が進められ、ゴドキンは編集上の絶対自由を条件に編集長となる。ウエンデル・P・ギャリソンを強力なスタッフに加え、¹⁷ ボストンでジャーナリズムの実務に携わっていたチャールズ・E・ノートンから手厚い協力を得たゴドキンはニューヨークにオフィスを構え、1865年7月に週刊『ネイション』を創刊した。当時33歳であったゴドキンはアメリカの政治を浄化し、デモクラシーを純化させたいという大望を抱いていた。同誌はおおむね次のように目標を謳っている。①現代のトピックを他の日刊紙よりも正確かつ穏健に議論する。②社会、政治における真のデモクラシー原理を維持し、普及させる。進歩と文明の成果を広めていくための主張を行う。③南部の労働者階級〔黒人〕の社会的地位を真剣に考え続ける。④全コミュニティがもっとも関心をもつような道德、政治等の原則を掲げる。⑤大衆教育の政治的重要性を知らしめる。⑥南部の状態について信頼できる情報を集める。⑦健全で偏らない書評、芸術批評を行う。以上が『ネイション』の基本方針であった。¹⁸

こうして創刊された『ネイション』は多彩な執筆陣を誇り、詩人のヘンリー・W・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow)、ジェームズ・R・ローウェル (James Russell Lowell)、心理学者ウィリアム・ジェームズ (William James) と小説家ヘンリー・ジェームズ (Henry James) 兄弟など数多くの有識者が文章を載せた。¹⁹ ゴドキンは通常、リードの政治記事を書いたほか、他の執筆者とともに社説“The Week”欄を担当し、文芸面はギャリソン等に任せた。読者はニューイングランドを中心とする知識人であり、後の大統領ウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) はプリンストン大学院時代、ゴドキンの社説から抜書を作っていたし、歴史家ジェームズ・F・ローズ (James Ford Rhodes) はシカゴ大学の学生時代以来、同誌を欠かすことなく読んでいた。『ネイション』の愛好家はイギリスにもおり、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) とブライスは『ネイション』をアメリカ、そして恐らくは世界で最良の週刊誌と評している。しかしながら、明治5年 (1872) に1万部を超えた発行部数は、10年 (1877) までにもとの規模の半分を下回り、7,000部以下となる。財政難に悩む『ネイション』は明治14年 (1881)、ニューヨーク『イヴニング・ポスト』 (*Evening Post*) 社と合併し、『ポスト』紙のウィークリー版となった。ゴドキンは『イヴニング・ポスト』の編集長となり、『ネイション』についてはギャリソンが編集長となる。したがって蘇峰が愛読した明治15年から19年ごろ、『ネイション』の全盛期はすでに終わりを告げ、ゴドキンも編集長の座から降りていたわけである。しかしながら、ゴドキンはかつての部下であるギャリソンに支配力を行使し続け、『イヴニング・ポスト』と『ネイション』はともにゴドキンの影響下にあった。

『ネイション』においてイギリス自由思想を展開したゴドキンは、植民主義が自由貿易主義と相容れないとして領土拡張に反対し、マンチェスター学派のイギリス政治家、リチャード・コブデン (Richard Cobden)、ジョン・ブライト (John Bright) が「小英国主義者」とすれば、ゴドキンは「小アメリカ主義者」というべき立場にあった。そのため『ネイション』は創刊直後から、アラスカ買収を批判するなどアメリカの膨張を警戒し続け、ゴドキンは明

治30年（1897）のハワイ併合と翌31年（1898）の米西戦争に強く反対する。しかし、この戦争によってアメリカがプエルト・リコ、グアム、フィリピンを獲得すると、ゴドキンはアメリカに決定的な幻滅を覚え、イングランドへ渡り、悲観的な気持ちに包まれたまま明治35年（1902）、同地で亡くなるのである。

以上がゴドキンの経歴であるが、そこには蘇峰と様々な共通点が見出せる。第一に、二人とも天性のジャーナリストとして言論界に進んだことである。クリミア戦争で戦場を移動しつつ記事を書いたゴドキンの姿は、西南戦争に加わって戦時通信を送り続けた福地源一郎、さらにその福地に憧れて新聞記者となり、やがて日清戦争の報道に力を入れた蘇峰の姿を想起させる。蘇峰がゴドキンの『ネイション』をモデルの一つとして『国民之友』を発刊したのは皮相な模倣ではなく、『ネイション』がもともと蘇峰の内面に存在するジャーナリストとしての本性を引き出し、開花させる一助をなしたのであろう。『ネイション』はジャーナリストをめざす雌伏期の蘇峰にとって、自己実現のモデルとなり、自分の可能性を開いていくための良き目標であったと考えられる。

第二に、ゴドキンは青少年期にマンチェスター学派の自由貿易主義を吸収して思想の柱としたが、これは蘇峰も同様であった。蘇峰が自由貿易の必要性を学んだのは、『ネイション』購読の窓口となったラーネッドからであったが、ラーネッドはイエール大学時代に師事した伯父のシオドア・D・ウールジー総長から強い影響を受けていた。²⁰ そのウールジー邸でゴドキンは妻となる女性と出会い、後にウールジーに自由貿易主義の組織を作る上で助力を依頼している。²¹ つまり「イエール大学、ウールジー総長；ラーネッド⇒蘇峰、自由貿易主義、『ネイション』」という関係は「イエール大学、ウールジー総長⇔ゴドキン、自由貿易主義、『ネイション』」の関係と接点があることがわかる。蘇峰のために『ネイション』を取寄せたラーネッドは、イエール大学在学中にゴドキンもしくは『ネイション』を知り、数年後に来日してから蘇峰に同誌を勧めた可能性がある。²² しかしこの点については確証がなく、ただいえることは、ゴドキンとラーネッドがともに自由貿易の思想から影響を受け、ニューイングランドの知的文化の中に生き、そうしたムードがやがて蘇峰に伝わるということである。²³

以上のように二人は職業と思想の面で一定の共有点を持ち、蘇峰にとって『ネイション』は好ましい導き手であった。この蘇峰が『国民之友』を創刊して約六年半をへた明治26年（1893）、『ネイション』生みの親ゴドキンに手紙を書いている。蘇峰にとっては『国民之友』の好評に続いて『国民新聞』『家庭雑誌』を発刊し、新聞人の地位を確立した時期であった。その内容を見てみよう。²⁴

【明治26年7月4日 徳富猪一郎からE・L・ゴドキン】

Tokyo, Japan, July 4th 1893

E.L.Godkin Esq.

I deem it a great honor to let you know that for years every number of "The Nation" has been read with sympathy and admiration by the editor of "Kokumin no Tomo" ("The Nation's Friend") in which capacity I take the liberty to introduce myself to you.

“Kokumin no Tomo” is a political, social and literary review published at Tokyo. As such it holds a unique position among the most influential journals in the Empire. Politically it belongs to no party, only it stands invariably on the side of progress. On social, moral and religious problems it holds, as broad views as possible, the principle of humanity always, finding in it a sincere friend and an able advocate. On the whole it exists as the pioneer of reform in order to propagate healthy thought on all subjects which concern human society, and in many respects, if I may say so, “Kokumin no Tomo” is doing for Japan what “The Nation” is doing for America. I can not help wishing, therefore, that “Kokumin no Tomo” will not remain a stranger to “The Nation,” and in order to secure your acquaintance I ask you to accept its latest volume together with the late numbers of the morning paper and the home journal connected with it.

The morning paper (“Kokumin Shinbun”) is counted among the first of Japanese papers in dignity, circulation and influence. As its special correspondent an artist is now staying at Chicago. You may find that almost every one of its late numbers is illustrated by him. “Kokumin Shinbun” took the greatest trouble to report about Mr. Fukushima’s widely spoken travel through Siberia. You may see his portrait and that of his wife appended to the paper on the occasion of his triumphal return.

You will confer a a[sic] great favor in taking notice of “Kokumin no Tomo” and the other two publications connected with it, and in reviewing them on your paper, if you please.

Hoping for your kind acceptance of my humble request I remain[.]

Yours respectfully[.]

I. Tokutomi.

東京、日本、1893年7月4日

E・L・ゴドキン様

あなたに以下のことをお知らせするのは、私にとって大変な名誉であると思います。何年も前から『国民之友』編集者〔蘇峰〕は、『ネイション』各号を共感と賞賛の念をもって読んできました。そうしたわけで失礼をも顧みず自己紹介をさせて頂く次第です。

『国民之友』は政治、社会、文学評論誌で、東京で出版されています。日本帝国で発行されているもっとも影響力の高い雑誌のうちユニークな地位を占めています。政治的にはどの政党にも加わらず、絶えず進歩の側に立つだけです。社会、道徳、宗教上の問題については、できるだけ広い視野から人道の原則を常に守り、そこに誠実な友と有能な擁護者を見出しています。総じて改革のパイオニアとして存在しており、人間社会に関するあらゆる問題について健全な考えを広めようとしています。そして多くの点で、もし言えるなら『ネイション』がアメリカのためにしていることを『国民之友』は日本のためにしているのです。そのため私は『国民之友』が『ネイション』に赤の他人のままにしていることがないよう願わないではいられません。あなたに知己を得るために『国民之友』最新号、およびそれと関連して朝刊紙〔『国民新聞』〕の最近号と家庭向け雑誌〔『家庭雑誌』〕を一緒にお送りしましたので、受け取って頂けませんか。

朝刊紙は名声、発行部数、影響力において日本の一流新聞の一つとされています。特派員として今、画家が一人シカゴに滞在しています。新聞を見て頂ければ、いずれも彼が挿絵を描いていることがおわかりになるでしょう。『国民新聞』は福島氏の有名なシベリア横断旅行を報道するのに最大の労をとりました。福島氏が意気揚々と帰国したとき新聞に載った氏と夫人の肖像を見て頂けることでしょう。

もしよろしかったら『国民之友』と他の二つの新聞雑誌をとり上げて、あなたの新聞で論評して頂けませんか。

私のつまらぬお願いを受け入れて下さいましたら幸いです。

敬具
I. 徳富

手紙の前半三分の二はいわば自己紹介である。それによると、自分は『ネイション』に共感と賞賛の念を覚えつつ、何年間も読み続けてきた。『国民之友』は進歩をめざし、改革のパイオニアとして広い視野から健全な考えを広めようとしている。つまり『ネイション』がアメリカのためにしているのと同じことを『国民之友』は日本のために行っているのだ。そのため両誌は他人の間柄とは思えない。自分が発行している『国民之友』と『国民新聞』『家庭雑誌』のサンプルを送るから受け取って欲しい、そして私のことを知って欲しいというわけである。²⁵ 大江義塾時代以来、『ネイション』を愛読してきた蘇峰にとって、ゴドキンは憧れの人物であったのだろう。そのゴドキンに、自分はここまでのものを達成した、その思いを何とか知って欲しいという青年の初々しい気持が表れている。当時、蘇峰は30歳、ゴドキンは62歳であり、子が父に、あるいは生徒が教師にはじめて作品を差し出すときのような晴れやかな、しかしどこか緊張して可憐さを感じさせるような場面である。そこにはゴドキンに対する深い思いが感じられる。いまだ会ったことのない憧れのゴドキンに宛てた蘇峰のラブレターというべき書簡といえよう。

後半の三分の一は、手紙に同封したという『国民新聞』の紙面説明となっている。『国民新聞』は日本でもっとも影響力のある新聞の一つで、シカゴ博覧会に画家の特派員（久保田米僊）を送っており、またドイツ駐在武官であった福島安正陸軍少佐がロシア、シベリアを単騎横断して6月に帰国したばかりであったが、『国民新聞』はその報道に尽力したので、そのときの写真を見てほしいというのである。そこには国際舞台における日本人の進出と活躍を誇らしげに語る蘇峰の表情がうかがえる。それは西洋列強のアジア進出に対して愛国心を燃やし、富国強兵化を進め、国際社会で徐々に自信をつけてきた日本人の気持でもあった。さらに蘇峰は『ネイション』誌上に自分の新聞雑誌を紹介して欲しいと依頼しており、自己の手がけた作品を敬愛するゴドキンの雑誌に、しかも海外に示してみたいという思いが垣間見える。

その後、蘇峰はゴドキンから何通かの手紙を受け取ったというが、管見の及ぶ限り、それらは現在、見当たらない状況である。²⁶ したがって両者のやり取りをここで明らかにすることはできない。唯一の資料である上記の書簡からいえることは、蘇峰が自己実現の目標であっ

た『ネイション』を産み出したゴドキンに憧れと敬愛のまなざしを向けていたということである。ただし両者の間には隠されたギャップがあったことを指摘しておきたい。それは第一に、愛国者の蘇峰とコスモポリタンのゴドキンは、日本ないしアメリカに対するスタンスがおのずから異なったことである。蘇峰の究極的な目標は言論を通じて西洋列強に遅れをとらない日本を建設することにあつた。ロシアやイギリスの脅威を感じる中で成長したかれは熱烈な愛国者となり、常に日本の国益を念頭に置いていた。他方、ゴドキンには、アジアの植民地化を見て苦闘する日本人のような切迫した気持は乏しく、その生い立ちを見てもわかるようにアイルランド、イングランド、アメリカの間を精神的に揺れ動き続け、イングランド、アメリカ間の問題をめぐって忠誠心が分裂することもあつた。²⁷ さらに晩年は、アメリカに失望してイングランドに逃避してしまうのである。それを考えると、蘇峰とゴドキンは同じジャーナリストではあつたが、自国に対する思いの深さが異なつていた。そのため蘇峰が手紙に記した言葉、すなわち『ネイション』がアメリカのためにしていることを『国民之友』は日本のためにしているという個所を読むと、確かに「進歩と文明」という点で両者の目的は一見類似するものの、蘇峰自身の強烈な愛国心をゴドキンと『ネイション』に投影しているような印象を受けるのである。

第二に、蘇峰は仰ぎ見るゴドキンが、実はかれが嫌つた白人優越主義を抱いていたことを十分認識していなかつたと考えられる。ゴドキンにとって自分達の文明こそが道徳的にも物質的にもベストであり、それは東洋にはありそうもないものだつた。²⁸ したがつて、かれはアメリカから清国の移民を締め出すことには批判を加えたが、「後進的」なシナ人労働者に十分な市民権を与えることには反対であり、²⁹ ハワイ併合は「無知、迷信的」で外国語を話す有権者を生み出す可能性があり、それよりもハワイを保護国にして開発したほうが利益が大きいと考へた。³⁰ またゴドキンは奴隷解放宣言を支持したが、「無知」でどのような文明的人種よりも「衝動的」な黒人を同化することはできないとした。³¹ このようにゴドキンがアジア、アフリカ系人種は白人よりも非文明的で劣つていて考へていたのは確かであつた。もし蘇峰が、こうしたゴドキンの優越心をよく把握していたら、あるいはそれが日本人に向けられていたならば、かれのゴドキン評価はもう少し複雑なものになっていたかもしれない。しかしながら明治二十年代の蘇峰は、アメリカへの批判は抑えつつ、憧憬の気持を強く表に押し出していたのであつた。

2 チャールズ・E・ノートン

明治28年(1895)、日清戦争の勝利と三国干渉の衝撃を味わつた蘇峰は、翌29年(1896)5月、欧米巡遊のため横浜を出港し、ヨーロッパ各国、ロシアを回つた後、30年5月、ロンドンよりアメリカに渡り、ニューヨーク、ボストンを訪れ、シカゴ、サンフランシスコを經由して6月末に帰国した。³² この旅行の主眼はヨーロッパに置かれ、アメリカは帰路に立ち寄る程度であつたが、マサチューセッツ州ケンブリッジでチャールズ・E・ノートン、及びノートンの知己ウィリアム・ジェームズと面会し、故ロングフェロー邸を訪問してその娘に会つたほか、

ボストン近郊のコンコードにあるラルフ・W・エマソン (Ralph Waldo Emerson) の故宅と墓所を見学したことが知られている。³³ 蘇峰はロングフェローの詩集とエマソンの著作の愛読者であったから、両者ゆかりの地を訪ねたのであろう。またノートンの下を訪れた経緯は明らかではないが、ノートンはゴドキン、ロングフェロー、エマソンと親しい間柄にあり、それを知る者から蘇峰は紹介状を得たのかもしれない。結局、蘇峰とノートンの面談は、後述の書簡からわかるように一時間にすぎなかったが、そこには様々な意味が込められていた。

ノートンはゴドキンの良き支援者であり、『ネイション』創刊の功労者であった。まずその経歴を見ておこう。³⁴ 1827年、ノートンはマサチューセッツ州ケンブリッジで生まれた。先祖は1635年にイギリスから渡った清教徒であり、ノートンの家庭とそれをとりまくニューイングランドにはピューリタンの伝統が色濃く残っていた。父親はユニテリアン派の聖職者、ハーヴァード大学神学部の教授で、雑誌に携わるジャーナリストでもあった。母親はボストンの富裕な商人の娘である。夫妻はケンブリッジに「シェイディ・ヒル」(Shady Hill) と呼ばれた広大な邸宅を構え、ノートンもここで生まれ、亡くなることになる。名家に育ったかれは、ピューリタン時代以来の方式で教育を受け、セカンダリ・スクール (中等学校) でギリシャ、ラテンの古典を学んだ後、14歳でハーヴァードに入学し、ギリシア、ラテン語、経済学 (political economy) に優秀な成績を収め、18歳で卒業した。卒業後はビジネスの世界に入ったが、健康悪化のため断念し、静養を兼ねた約二年間のヨーロッパ旅行でとくにイタリアの絵画、建築を見て回るとともに、イギリスでジョン・ラスキン (John Ruskin) の感化を受け、中世とルネッサンスの芸術史研究に着手する。

帰国したノートンは、アメリカ人の中に優れた芸術への趣味を涵養しよう、世俗的な富よりも教養を重んじる雰囲気を作り出そうという使命を覚え、新聞雑誌に芸術批評を書いた。そのかたわら、南北戦争では自由のための戦いを説いて北軍を激励する。戦争末期の1865年、『ネイション』の刊行準備に加わったノートンは、ゴドキンに編集職を依頼するとともに、寄稿者の手配や資金調達を精力的に行う。例えばシェイディ・ヒルにゴドキンを泊めてパーティを開き、名士に協力を呼びかけ、その結果『ネイション』創刊号の執筆者の半数はかれの助力によって得られたという。さらにノートン自身も創刊号に筆をとり、以後も芸術、文学の書評を載せたほか、編集上の顧問格をつとめ、金銭面の援助を申し出るなど支援を絶やさず、ゴドキンとノートンは深い信頼関係で結ばれた。

明治7年 (1874) よりノートンはハーヴァード大学の講師に採用され、翌年、アメリカで最初の芸術史担当教授となる。当時のハーヴァードはウィリアム・ジェームズなど名だたる教員によって黄金時代を迎えており、その中でノートンが受け持った講義は「建築とデザイン、及びその文学との関係」であった。アメリカの学問と芸術はヨーロッパに比べて貧弱であると憂えたノートンは、芸術とは道徳と知力の発現であることを説き、学生がその感受性を洗練させるように願った。かれにとって講義や執筆活動は、学芸を枯渇させて物質主義の蔓延をたくらむ「悪魔とその仲間たち」への戦いに他ならなかった。受講者は年を追って増え、かれの影響を受けた学生は一万人にのぼるといわれる。ノートンの信条は「自分の信奉者になるよりも独立した思索者たれ」というもので、学生はかれが芸術史だけでなく婦人参政権

や教育など様々な問題についても語るのを聞いた。明治31年（1898）11月、71歳の誕生日を迎えたノートンは退職するが、その数ヶ月前、かれは全米に波乱を巻き起こした。同年4月に米西戦争が始まり好戦的なムードがアメリカ国内を覆う中で、ノートンは戦争を非難したのである。授業に臨んだノートンは次のように述べた。スペインとの戦いは野蛮であり、教養ある青年はこの不必要な犯罪的戦争で弱小国と戦うよりも、もっと良い国家への貢献、文明的な平和活動に責任をもつべきだというのである。学生は好意的に反応したものの、ノートンの言葉は不正確に報道され、新聞や超愛国主義者から非難の声があがり、脅迫状すら届く有様となった。しかし、ノートンは初志を揺るがせず、ケンブリッジで「真の愛国心」と題する講演を行い、アメリカは弱くてその気もない国に戦争を強いた、この故意の侵略は文明から野蛮への後戻りだと主張した。大学を退職してからのノートンは著述に専念し、明治41年（1908）、80歳で亡くなっている。

以上がノートンの略歴である。このノートンに蘇峰が面会したのは、明治30年（1897）5月26日、ケンブリッジのノートン邸シェイディ・ヒルにおいてであり、ノートンが大学を退職する一年半前のことであった。³⁵ ノートンと蘇峰の会見は興味深いものがあった。なぜなら二人は似通った精神的土壌を有したからである。それはまず、エリートとしての義務意識と奉仕の精神、愛国心であった。ニューイングランドのピューリタンの名家に生まれたノートンは自分を「ニューイングランドの貴族」と考え、ソープレス・オブリージュの精神を抱いており、高貴な文化を守ることによって国民の品性を向上させなければならないと考えていた。他方、蘇峰の祖先は江戸期に肥後国芦北郡津奈木手永などの御惣庄屋を歴任し、手永内の村々の行政と領民の指導に力を注いできた郷士である。³⁶ 父祖の遺業と武士としての誇りを心に秘める蘇峰は、常に国民の教化を念頭に置き、老年になっても「文章報国」を旨として健筆をふるった。³⁷ さらに、両者はイギリス、アメリカの文学的教養を備えていた。ノートンはギリシャ、ラテンの古典を、蘇峰は漢学あるいは頼山陽などの史書を幼少期から学び、ともに豊かな教養の基礎を築いたが、長じてからは二人ともエマソン、ロングフェロー、ラスキン、トマス・カーライル（Thomas Carlyle）等の英米の文芸書を愛読している。蘇峰がケンブリッジを訪ねたとき、エマソン、ロングフェローはすでに亡くなっていたが、かれらとノートンはかつて同地の名士二十人ほどが属したサタデー・クラブのメンバーで住居も近く、親密な交友関係にあった。ノートンはエマソンを詩人として賞賛し、他方、漢詩人としての一面をもつ蘇峰は、エマソンの詩心を見抜く繊細な感受性をもち合わせており、そうした文学的感性においても両者には共通の地盤があった。このようにピューリタンの遺風と侍の遺風をもつ日米二人の教養人が明治半ばのアメリカで出会った。当時ノートンは70歳、蘇峰は34歳で、その差は親子ほどあり、蘇峰は大学の老教授から教えを受けるという態度をとったであろう。しかしながら、物質よりも精神を重んじる二人は、今日われわれが想像する以上に、その短い時間の中でお互いを敏感に感じ取ったのではないだろうか。両者は『ネイション』やエマソン、ロングフェローについて言葉を交わしたのではないかと考えられるが、それは推測の域を出ない。ただしノートンはこのとき自分が編集した『カーライル回想録』（*Reminiscences by Thomas Carlyle*）と『ゲーテ、カーライルの往復書簡集』（*Correspondence*

Between Goethe and Carlyle) を蘇峰に贈呈しているから、³⁸ 少なくとも文芸の話題が出たことは確かであろう。しかし蘇峰の心に残ったのは、ゴドキンの学芸以上に、その人格から生じ出る香気であった。約十年後、このときをふり返って蘇峰は次のように述べている。³⁹

…ケムブリッジに抵り、ノルトン教授を日蔭の丘に訪ひ、清談半晌、是に於てか、記者は米国を尊重するの念、油然として我懐に生ずるを禁する能はざりき。教授の住家は、何等の気取りたることもなき、何等の衒ふたる痕もなき、唯た清素なる市民の、清素なる居所としてより外は、受取られざる也。教授は何等の大人振りたる面影もなく、…。…記者は崇高に思想し、簡易に生活するの標本を、眼前に見得たるを驚喜したりき。…若しロックフェルラー、モルガン一輩の徒が、米国文明の一面を代表す可しとせば、教授の如きは、乃ち他の半面を代表するものと云はざるを得ず。教授は実に立派なる清教徒の血統を受け、健剛、凜烈なる清教徒の精神に加味するに、淵博なる希臘、羅馬、及び中世伊太利の教養と、精微なる近代の学問とを以てし。之を潤色するに、当世一流の文人、芸術家、其他の交遊切磋を以てしたり。

これによると、ノートンの住居は気取りがなく清潔素朴であり、その人物は剛健なピューリタンの精神と古典の教養で彩られていた。自分はノートンに接してアメリカを尊重する心が油然と湧き起こったというのである。回想であるから、当時の実感とは異なる部分や後から得た知識もあるだろうが、蘇峰が黄禍論的日米戦争論に悩まされ、反米に傾きつつある時期に書かれたものであるだけに傾聴に値する。蘇峰がノートンに深い敬慕の気持を抱いたことは、その後、頻繁に手紙を書いていることから明らかである。約一か月後、日本に帰国した蘇峰は、直ちにノートンへ書簡を送り、⁴⁰ 年末には深井英五と連名のグリーティング・カードを送った。⁴¹ さらに翌31年(1898)2月付でノートンの亡友チャイルド教授について書かれた新聞記事をノートンに送付し、⁴² 同年の年末にもやはり深井と連名のグリーティング・カードを送っている。⁴³ こうした蘇峰に対して、ノートンは明治32年(1899)1月、次のような書簡を蘇峰に記した。⁴⁴ 前年秋に大学を引退し、米西戦争を強く批判していたころである。

【明治32年1月20日 C・E・ノートンから徳富猪一郎】

Shady Hill, Cambridge, Mass.

20 January, 1899.

Dear Sir: —yesterday morning I took from the pile of unanswered letters on my table the kind letter which you sent to me eighteen months ago, saying to myself,—Before the day ends I will write a word to Mr. Tokutomi of kind remembrance and good wishes. But the day was crowded with various affairs so that I could not accomplish my design, and just as the night was closing in the evening mail brought to me the pleasant card bearing kind Christmas greetings from Mr. Fukai and yourself! It was a happy coincidence. I thank you both for your friendly remembrance. I often recall with pleasure our too

brief personal acquaintance, and wish that I might again, before long, have the honor of receiving a visit from you in my study.

Were you to come again to America you would find it greatly changed from the America of two years ago. The war with Spain was the beginning of a portentous revolution in the United States. The nation has rejected its old ideals, has flung away its enormous advantage and blessing of independence of foreign complication, of peaceful security within its own borders, and of freedom from the burdens of militarism which weigh so heavily upon the old world. It had difficult and threatening problems of its own to solve, it has taken a course which brings it to face other problems were more difficult, and which it is in no condition to attempt with a prospect of satisfactory solution.

It is a bitter disappointment to us who loved the old America, and who, in spite of many reasons for discouragement, still hoped that the evils in her political social order might, in the long run, be mastered by the good.

I hope that you have cause for more content with the outlook in Japan. I hope that the year has begun happily for you personally. I beg you to give my very kind regards to Mr. Fukai, and to believe me[.]

Sincerely Yours[.]

C.E. Norton.

シェイデイ・ヒル、ケンブリッジ、マサチューセッツ州

1899年1月20日

拝啓 昨日の朝、テーブルに置かれた未整理の手紙の束から、あなたが18ヶ月前に送って下さった親切な手紙を取り出し、心の中で考えました。今日中に徳富さんへ思い出と好意を込めた手紙を書こうと。しかし、いろいろなことで忙しく、その通りに行きませんでした。そして、ちょうど夜になろうというとき、夕方の便が届きました。それは深井さんとあなたからクリスマスの挨拶を記したすばらしいカードだったのです! うれしい偶然の一致でした。あなた方が好意をもって思い出して下さり感謝にたえません。私はよく、私たちが知り合いとなったあの短かすぎた一時のことを嬉しく思い起こします。そして再び遠からず、私の書齋を訪問して下さいと思います。

もう一度アメリカにいらしたら、二年前とすっかり変わったことに気がつかれるでしょう。スペインとの戦争はアメリカの不吉な大変化のはじまりでした。この国は古い理想を退け、莫大な利点と天恵を振り捨ててしまったのです。今までは外国の紛糾した問題と無関係で、国境内に平和と安全を保ち、旧世界に重くのしかかる軍国主義の重荷から自由でいられたのに。アメリカ自体に解決しなければならない困難で迫り来る問題があるというのに、別のもっと難しい問題に直面する方向を選んでしまったのです。しかし満足のいく解決の見通しをもって当たれるような状況にはありません。

私たち古きアメリカを愛する者にとっては苦い失望です。がっかりさせられる理由は多々あっても、私たちはアメリカの政治社会体制上の悪が、長い目で見れば善によって克服され

るだろうと期待していました。

日本での見通しはもっと満足のいくものであってほしいものです。この新年があなたにとって幸せに幕をあけておりますように。深井さんにどうかよろしくお伝え下さい。そして私を信じて下さいますように。

敬具

C・E・ノートン

蘇峰は18ヶ月前にノートンに手紙を送ったが、ノートンは返事を出さなかった。18ヶ月前とは明治30年7月であるから、蘇峰は帰国後、すぐにノートンへ礼状を出したのであろう。⁴⁵次に手紙は本題に入り、米西戦争をめぐるノートンの考えが吐露される。それによると、これまで旧世界から孤立してきたアメリカは、戦争を選ぶことによって自らヨーロッパとのやっかいな問題、ひいては軍国主義的な方向に足を踏み入れざるを得なくなった。かつての理想をなげうったアメリカは、蘇峰が渡米したときはすっかり変わってしまったとノートンは嘆く。約十年後の回想によると、当時の蘇峰はノートンの意見につき次のように感じたという。⁴⁶

米西戦争の頃には、教授は記者〔蘇峰〕に書を与へて、其の慨嘆を漏らしぬ。人気、不人気は、彼の問ふ所にあらず。彼は直ちに其の所信を、明切に告白したるのみ。記者は教授の意見に賛成するにあらず、否な彼や寧ろ新時代より取り遣されたる一人たるやも、未だ知る可らずと雖も。其の濟世の志の、老て愈よ壮なるを多とせずんはあらず。

自分はノートン教授の考えに賛成しない、むしろかれは新しい帝国主義的発展の時代に取り残されたのではないか。しかしながら、教授は世評を顧みず所信を表明したのであり、その志は多としなければならぬと蘇峰は追想する。ノートンから手紙を受け取ったころ、日本の対外膨張を願っていた蘇峰は、帝国主義そのものをノートンのように否定的にとらえなかった。むしろ新時代の潮流としてそれに適応することが日本の国益にかなうと考えていたのである。そのためノートンの主張には賛同しなかった。しかしながら、反米的な見方を押し出すようになった大正から昭和戦前、戦中期の蘇峰は、ノートンとよく似た見解を示すようになる。その期間の蘇峰は、アメリカが米西戦争以降、帝国主義に傾いて古き良き時代の理想を失い、太平洋とシナ大陸への膨張を図って日本の生存権を圧迫するようになったという批判をくり返した。⁴⁷そこには清教徒の遺風が香る理想的時代のアメリカが好戦的帝国主義に転向し、その刃を日本に向けてきたという失望と怒りが込められている。ノートンはアメリカの帝国主義が日本と競合するか否かとは関係なく、それ自体を否定したのだが、蘇峰はそれが日本の帝国主義を妨害すると感じられた際に憤り、ノートンが用いたのと同じ論法を用いてアメリカを非難したのである。蘇峰はアメリカに関する多くの文献を読んでおり、ここでノートンからの影響のみを強調するのは慎まなければならない。しかしながらノートンの見方が心に残り、それが後年、蘇峰が議論を組み立てる際に一つの材料として作用したの

ではないだろうか。

この年の年末ないしは翌明治33年（1900）早々に、蘇峰は三たびノートンにグリーティング・カードを出し、⁴⁸ さらに33年頃、娘であろうか「小さな少女の写真」を送り、ついで34年（1901）には『国民新聞』元旦号を送っている。⁴⁹ このように蘇峰は小まめにノートンへの配慮を欠かさなかったため、ノートンは友人のサミュエル・G・ウォード（Samuel Gray Ward）に次のような書簡を送り、蘇峰についてコメントしている。⁵⁰

【明治34年10月7日 C・E・ノートンからS・G・ウォード】

Shady Hill, 7 October, 1901

Here is a letter from Japan which will interest you, and I send with it the little book to which it refers, and which touches one's sense of humour by the poignancy of the contrasts which it evokes. Mr. Tokutomi was in America four or five years ago, and spent an hour with me, and since then he has from time to time sent to me some pleasant token of remembrance. He seemed to me one of the Japanese marvels, with a keen, ready, assimilating intelligence, an exquisitely refined taste, and an inscrutable soul, as distinct from us spiritually as physically. I used to tell my classes that civilization was a purely relative term, meaning the sum of the acquisitions of a race at any given time, and not as white people are apt to assume a possession exclusively theirs. If the Chinese and Japanese civilization were in one scale, and the British and American in another, it is likely that they would more nearly balance each other than the missionaries and the Christians generally have supposed. I have no such liking for our civilization that I want to see it prevail in Asia, and I cannot but hope that the Chinese have drawn back only *pour mieux sauter*.

[Hereafter omitted.]

シェイデイ・ヒル、1901年10月7日

ここにあなたが興味をもつだろう日本からの手紙があります。その手紙とそこで述べられている小冊子をお送りします。その本はそれが呼び覚ます痛烈な対照によって人間のユーモアのセンスに触れるものです。徳富氏は四、五年前、アメリカに来て、私と一時間、時を過ごしました。それ以来、かれは時折うれしい思い出のしるしを私に送ってくれます。かれは私にとって驚くべき日本人の一人に思えました。鋭く機敏で吸収力のある知性、優雅に洗練された趣味、神秘的な魂をもち、私たちとは肉体だけでなく精神的にも異なるようでした。私はよく授業で次のように話したものです。文明とはまったく相対的な言葉で、そのときその人種が手に入れたものの総体を意味するのであり、白人はそれを自分たちだけのものだと考えがちだが、そういうものではないと。もし天秤の一方にシナと日本の文明を、他方にイギリスとアメリカの文明を乗せるなら、宣教師やキリスト教徒がこれまで普通考えてきたよりもバランスがとれることでしょう。私は自分たちの文明がアジアで幅をきかせるようなものであって欲しくありません。シナ人は〔将来〕ただより一層飛躍するために、これまで後

ろに退いてきたのだと思いたくなるのです。

[以下略]

ウォードはボストンの銀行家で、ノートン、エマソン、ロングフェローなどと同じくサタデー・クラブのメンバーであったが⁵¹、二十世紀に入って仲間のほとんどは世を去り、ウォードはノートンにとって数少ない旧友であった。この書簡から明らかなように、ケンブリッジでの蘇峰とノートンの会見は一時間に過ぎなかったが、ノートンは一方で蘇峰の知性と趣味の良さを直ちに目撃するとともに、他方、蘇峰の「神秘的な魂」、精神、外見に一種のカルチャー・ショックを受けている。蘇峰の背後に英米とは異質の文化の存在を感じ取ったのである。すでに記したように、ノートンと蘇峰の精神、教養には今日から見ると様々な共通性があった。しかし日米が会って間もないこの当時においては、少なくともノートンにとって蘇峰はエキゾチックな異邦人に見えたことであろう。しかしながらノートンはアングロサクソン文明こそが唯一の文明であるという独善的な態度はとらず、英米の文化と日本、シナの文化を相対的に眺める余裕をもっていた。

この書簡によると、蘇峰はノートンに手紙と小冊子を送って寄越した。その冊子はノートンにユーモラスな印象を与えるもので、それをウォードに転送するという。ノートンが微笑んだこの小冊子とはどのような本だったのか。それは次の書簡に示されている。⁵²

【明治34年10月20日 C・E・ノートンから徳富猪一郎】

Shady Hill, Cambridge, Massachusetts.

20 October, 1901.

Dear Mr. Tokutomi:—

Your letter to me and the copy of the Japanese translation Emerson's "Letters to a Friend", which you were good enough to send to me, have given me great pleasure. I sent the little volume at once to the "Friend" to whom the letters were originally addressed, and I have a letter from him this morning in which he says:—"I found the Japanese translation of the little book of Emerson's letters a matter of extraordinary interest. How inconceivable when those letters were written that there should have developed such a Japan as we now know, and again that a learned Japanese should have had them translated for the delight of the few of his countrymen who could appreciate such a delicate product!" He adds: What you say of the two civilizations [our own and that of Japan] [sic] is as true as possible, but what is always the most interesting point is, which civilization has the force to put itself to the front in the coming time."

This "Friend" is now an old man, who has just passed his 84th birthday. He is still in full possession of his faculties, which have always been remarkable. His name is Samuel Gray Ward. He was born in Boston, and has spent most of his life there, but for some years past, since retiring from

active affairs, he has lived in Washington. He is a man of great culture, of strong intellectual powers and tastes, but he was for many years the agent of the house of Baring Brothers & Co., at the time when this house stood unrivalled at the head of the banking world. He has never written any considerable work for publication, but his letters are still of the highest interest from the depth of his reflections, and the breadth of his view. There are few wiser old men than he.

The revolution which has taken place in the public affairs of America during the last three years is of no good augury for the peace of the world, or for the future development of this country. The reversal of our national ideals, and the rejection of some of the fundamental principles of our national life up to this time, have been a bitter disappointment & sorrow to me, and I have exposed myself to much popular obloquy by striving against them to the best of my power. I can only hope that my forecasts of the future may be mistaken.

I have before me, as I write, the the[sic], photograph of your charming little girl which you were so kind as to send to me some time ago. I hope that she is well & happy. May I ask of you the favor to send to me a photograph of yourself, and also to send to me four or five copies of the translation of the "Letters"? I want to place one in our University Library, & one in the Boston Public Library, & one in the Concord Library. Believe me, with very kind regards, Sincerely Yours[,]

Charles Eliot Norton.

シェイデイ・ヒル、ケンブリッジ、マサチューセッツ州
1901年10月20日

親愛なる徳富様

あなたが送って下さった手紙、ならびにエマソンの『友人への書簡』日本語訳を受け取り、大変喜んでいました。すぐにその小冊子を、エマソンが手紙を宛てた当の「友人」に送りました。その人から今朝、手紙が届きました。かれはこう述べています。—「エマソン書簡集の小冊子日本語訳には大変な興味をもちました。そこに載っている手紙が書かれたころ、今の日本のような国が出てくるとは思いもよりませんでしたし、その手紙を学問のある日本人が翻訳して、そういう繊細な作品を味わえる少数の同胞たちを楽しませることになろうとは、想像もできませんでした！」かれはさらに言います。あなたが二つの文明〔私たち自身の文明と日本のそれ〕について述べたことは可能な限り真実を尽くしています。しかし常にもっとも興味深いのは次の点です。すなわち、どちらの文明が来たる時代に指導的立場につく力があるかということです。」

この「友人」は今は老人で、ちょうど84歳の誕生日を過ぎたところです。それでもかれは、これまでいつもそうであったように、今でも十分能力に満ちています。名前はサミュエル・グレイ・ウォードといひます。ボストン生まれで、人生のほとんどをそこで過ごしました。ただし活動的な職務を退いた後、数年前よりワシントンに住んでいます。大変な教養、高い知的能力、趣味の持主です。長年、ベアリング兄弟商会の代理人をつとめました。そのとき

この会社は銀行界の上位にあり、他に競争相手がいない有様でした。かれは重要な著作を書いたことはありませんが、その手紙は深い熟考、広い視野を示し、今なお非常に興味深いものです。かれほど賢い老人は滅多にいません。

過去三年間、アメリカの公事で起きてきた激変は世界平和、またはこの国の将来の発展にとって良い前兆ではありません。国家の理想が逆戻りし、国民生活の根本的な原則のいくつかが棄却され、私は苦々しい落胆と悲しみの気持を味わってきました。全力をふるってそれらと戦ってきたため、大衆から多くの誹謗を受けてきました。私の未来の予想がはずれることを望むだけです。

ペンをとっている私の前には、チャーミングなあなたの小さな女の子の写真有ります。しばらく前にあなたが親切にも送ってくれたものです。彼女が健康で幸せでありますように。それからあなた自身の写真もお願いしてよろしいでしょうか。そして『書簡』の訳書も四、五冊送って頂けませんか？私たちの大学図書館、ボストン公共図書館、コンコード図書館に一冊ずつ入れたいのです。⁵³ どうか私のことを信じて下さいますようお願いいたします。

敬具

チャールズ・エリオット・ノートン

これによると蘇峰はノートンが編集した『ラルフ・ウォルドー・エマソンから友人への書簡 1838—1853年』(*Letters from Ralph Waldo Emerson to a Friend 1838-1853*)の日本語訳本をノートンに贈呈した。⁵⁴ ノートンは、まさにこの書でいうエマソンの「友人」であるウォードにそれを見せたところ、ウォードは大変な興味を示し、そうした訳書を作り出す日本及び日本人に関心を向けた。さらにノートンはアメリカ、イギリス文明と日本、シナ文明はそれぞれ相対的に存在するものだとしていたが、ウォードはそれに同意した上で、自分はどちらの文明が将来、優勢になるかという問題に興味があると述べたという。日清戦争後、国際舞台に登場し、欧米人の目を引き始めていた日本の存在は、ノートンやウォードにも感じ取られていた。二人は日本と蘇峰を通じて、西洋と東アジアの出会い、あるいはその運命に思いを馳せた。渡米してノートンに面会し、帰国後も出版物を送るなどして接触を続けた蘇峰は、ノートンひいてはウォードに、それは決して甚大なものではなかったにせよ、文化的なショックをもたらしたのである。日本に対するノートンの関心はその後も消えることがなかった。明治37年(1904)の日露戦争勃発後、かれは日本を応援するかたわら、世界政治における日本の役割という問題に好奇心を刺激されることになる。⁵⁵ ある日本人宛ての書簡の中で欧米と日本の異文化接触に言及したノートンは、蒸気と電気によってコミュニケーションが進み、世界が小さくなり、どんな国も孤立しているわけにはいかなかった。私たちは東洋から学び、日本人は西洋から学ばなければならないと述べている。⁵⁶

明治40年(1907)冬、蘇峰はノートンからクリスマス・カードを受け取ったが、その筆跡は震えており、ノートンの生命が長くないことが予感された。⁵⁷ 翌41年10月、ノートンは80歳で亡くなる。『国民新聞』に弔文を載せた蘇峰は、ノートンを「古道を守るの君子」とし、か

つて無名の自分に会ってくれたことを今でも感謝している、今や教授の訃報を聞く、悲しいかなとその死を惜しんだ。⁵⁸ このようにノートンは、理想をもった飾り気のない清教徒、敬慕すべきアメリカの君子人として、蘇峰の心にゆかしい印象を残したのである。

3 ジョージ・ケナン

明治37年（1904）から翌年における日露戦争期、蘇峰は密接な関係にあった桂太郎首相から、①言論と文章によって国民を率い挙国一致の実をあげることに、②日本の立場を第三国に説明して諒解させることに、③外国の使臣や特派記者を操縦することの三点を委託された。この方針にしたがって、蘇峰は駐日アメリカ公使ロイド・C・グリスコム（Lloyd Carpenter Griscom）とたびたび会談し、「米公使館の東洋書記官ミルラー」は連日、国民新聞社に来て情報を入手したという。⁵⁹ またアメリカの雑誌『アウトルック』（*Outlook*）特派員ジョージ・ケナンなど外国の有力記者を紹介して桂と直接交渉できるようにしたという。こうしたことが英米の世論を日本に傾ける上で多少の効果があったと蘇峰は回想する。⁶⁰

日露戦争下、蘇峰と接触をもったジョージ・ケナンとはどのような人物であったか。まずその経歴を見ておこう。⁶¹ ケナンは1845年、オハイオ州ノーウォークで生まれたジャーナリスト、ロシア研究者である。第二次世界大戦後、ソ連問題の権威として著名になったジョージ・F・ケナン（George Frost Kennan）はその親類にあたる。⁶² ケナンが誕生したころ、アメリカではテレグラフの時代が始まったばかりであり、マニフェスト・デスティニーと科学技術の進歩のムードの中で育ったケナンは、父親の影響で少年期から電信機のキーに親しみ、若くして電信技士となった。やがてアメリカからブリティッシュ・コロンビア、アラスカ、ベーリング海峡をへてシベリアにケーブルを敷くという計画が持ち上がり、1865年、その準備のための遠征隊がシベリアに派遣されることになる。20歳のケナンもこれに参加し、二年以上シベリアで調査と準備にあたった。計画は途中で中止されるが、シベリアからヨーロッパ・ロシアを旅して帰国したケナンは、ロシアに好感と敬意を抱くようになる。

シベリアから戻ったケナンは、各地で講演ツアーを行い、エキゾチックなシベリアでの冒険談を語って聞かせ、さらにそれらをまとめた処女作『シベリアのテント生活』（*Tent Life in Siberia*）を刊行した。明治3年（1870）には二度目のロシア旅行を行い、ペテルブルグからカスピ海をへてコーカサス地方を訪れ、人々の暮らしや風土に再び好印象を得て帰国した。1870年代のかれは、中央アジアでロシアが膨張政策をとりイギリスと対立しても、ロシアは同地の文明化を試みているのだと擁護している。さらに1880年代に入ってもシベリアの流刑制度を正当化し、その講演はケナンのレパートリーとなって人気を呼んだ。⁶³ ひるがえって、同じ80年代の蘇峰は、ロシアの極東進出に強い警戒心を抱き、中央アジアにおけるロシアの南下とイギリスの対決についても、それが東アジア情勢に連鎖的な影響を及ぼすため、緊張しながら見守っていた。⁶⁴ この時点では、ロシアにロマンティックな好意を抱くナイーヴなケナンと、同国に批判的かつ冷徹な視線を注ぐ蘇峰との間には、大きなギャップが存在した。

ところが明治18年（1885）、流刑制度を調べるためシベリアを訪れたケナンは、自己の見解

の誤りを悟る。ロシア当局者の許可を得てシベリアの鉱山や三十以上の収容所を見学したケナンは、百人以上の政治犯と知り合った。この実地調査によって収容所の惨状を実感し、それまでは暴力革命主義者にすぎないと考えていた政治犯たちがいかに知的で教養があるかを感じたケナンは、かれらの反ツァーリズムに傾倒していった。⁶⁵ 帰国後、ケナンは英語圏における反ロシア政府の急先鋒として精力的に講演を行った。ツァー政府に抑圧されたロシア人は自由のために戦っているのだとかれが訴えると、観衆は感動して涙を流し、あるいは拍手喝采したという。当時のアメリカ人にとって、遠いロシアで自由を失った人々がアメリカに同情を求めていることを知らされるのは、潜在意識において心地の良いことだった。アメリカ人はロシアを通して自国の理想や自由で自信をもち、安心することができたのである。⁶⁶ もっとも、この時点でアメリカ人が常に反ロシアで固まっていたわけではない。しかしながら、ケナンの講演会場におけるかれらの感激と熱狂は、日露戦争時に日本を応援したときの態度と似ている。自由を求めてロシア政府と戦うシベリアの政治犯への同情と思い入れは、約十年後、帝政ロシアと戦う日本への同情と思い入れに移行されたのではなかったか。そのように考えると、ケナンは日露戦争をめぐるアメリカ人の親日ムードの素地を、意図しないまま醸成していたことになる。⁶⁷

明治36年（1903）、ロシアの満州進出がアメリカの利益に脅威を与えていたときに、南西ロシアのベッサラビア地方キシネフでユダヤ人虐殺事件が生じると、アメリカの言論はかつてないほど反ロシアでまとまった。翌37年（1904）2月、日露戦争が始まると、アメリカ人の支持は日本側へと集中した。その頃、ケナンは『アウトルック』に署名なしの社説を書いており、開戦直前にはロシアの政治経済、社会状態が日本の勝利をもたらす点を説明し、長期戦がロシアの欠陥を暴露し、革命活動を助長するだろうと予言している。3月、ケナンは『アウトルック』特派員として日本へ向かった。かれが執筆した記事は日本を称え、ロシアを軽蔑するもので、日本人は勤勉、精力的、能率的で礼儀正しく、品性、教育、愛国心、サムライ的忠誠心、義務意識、勇気、克己心、自己犠牲の精神のある国民として高く評価された。さらに、ケナンが示した「野蛮（ロシア）に対する文明（日本）の戦い」という図式を、アメリカの報道機関もしばしば表明することになる。6月、松山収容所を訪れたケナンは、ロシア兵捕虜が反ツァーの考えを抱いて帰国するよう計画を立て、かれらに『解放』（*Osvobozhdenie*）誌を読ませるため寺内正毅陸相に許可を求めた。寺内はそれを承諾し、『解放』を配送する事務所として陸軍省の利用を認めた。ケナンたちの宣伝は日本のあらゆる収容所捕虜に達してかれらに著しい不安を引き起こし、日本海海戦で捕虜となったバルチック艦隊司令長官ジノヴィ・P・ロジェストヴェンスキー（Zinovii Petrovich Rozhdestvensky）提督は満州軍総司令官アレクセイ・N・クロバトキン（Aleksei Nikolaevich Kuropatkin）大将に「日本にいるロシア人捕虜は組織的にアナキストにされてきた」と伝えたという。⁶⁸

戦後、朝鮮とシナを回ったケナンは明治39年（1906）6月に帰国するが、その後も日本を擁護し続けた。朝鮮、満州での日本の活動を文明の進歩と賞賛し、日本人は苦勞しながら「墮落」した朝鮮人を教化していると考えた。大正初年、アメリカに広まった日米未来戦論（ウォー・スケア）については根拠なしと退けている。最晩年はアメリカ人の日本理解を促進す

ることに関心をもち、大正13年（1924）、脳卒中で倒れたその日は日本の教育に関する記事を準備しており、それから二日後に亡くなった。一方、革命によってロシアに自由民主の政府が誕生することを期待したケナンは、大正6年（1917）のロシア革命の結果に落胆し、シベリア出兵と反ボルシェビキの宣伝を支援する。しかしロシアという広大な国とその民衆への愛情は、最後まで揺らぐことがなかった。

以上がケナンの経歴である。次に蘇峰とケナンの接触について述べてみたい。反帝政ロシア、親日のケナンは、大国ロシアと戦う上で不安を感じる蘇峰にとって心強い味方として感じられたに違いない。蘇峰とケナンが対面する仲立ちをしたのはアメリカ公使館で通訳を務め、日露戦争後に書記官となったランスフォード・S・ミラー（Ransford Stevens Miller）であった。⁶⁹ 明治37年8月、ミラーからケナンにあてた書簡には「『国民新聞』のエディターである徳富氏を紹介できて大変嬉しい」とあり、蘇峰はジャーナリストとしてケナンと共通の気質をもち、日本の政治経済に詳しく、またイギリスでも有名な人物であるとされている。⁷⁰ この紹介文が書かれてから二日後の8月5日、ケナンの下を蘇峰が訪れた。このときの模様はケナンの日記に次のように記されている。⁷¹ 所々単語が短縮されて書かれている。

【明治37年8月5日 ジョージ・ケナン日記】

Tokyo Friday. Aug.5. 04

Called yesterday on Mr. Shiga, Capt Takarabe and Mr Nabeshima, Today, rec'd call from Mr Tokutomi, editor of T Kokumin Shimbun who brot a ltr of introduction to me from Mr Miller of our Legation. Mr T. knew W. J. Stillman whom he met in Rome.—Had heard Lyman Abbott preach in Plymouth Church. Has long tkn Outlook.—Has high pitches, rather squeaky voice and closig his eyes when talking. Says if Jap-Russ war shld hv to result of emancipatg of Russns it wd be a by-product.—He is 99 to tk me to see Count Matsukata, Prest of Jap Red Cross and for mny yrs Jap minister of finance.—

Capt Takarabe said he feared Gen. Kuropatkin wld retire to Kharbin wont a decisive battle.

Mr Nabeshima sd t Jap govt was behind t Nagemon [Nagemoir?] land reclamation scheme in Korea.—

See Large book

東京 1904年8月5日 金曜日

昨日、志賀〔滋賀カ〕氏、財部大佐、鍋島氏を訪問。本日、東京の国民新聞の編集者、徳富氏の訪問を受ける。氏は公使館のミラー氏から私への紹介状を持参した。徳富氏はW・J・スティルマンを知っており、ローマで会っている。—ライマン・アボットがプリマス教会で説教するのを聞いたこともある。長い間、『アウトルック』を購読している。—甲高い声、むしろ金切り声で、話すときは両目を閉じている。氏によると、もし日露戦争がロシア人の解放をもたらすならば、それは副産物だろうという。—かれは99パーセント、松方伯爵に私を会

わせてくれるという。伯は日本赤十字総裁で長年蔵相を務めた人だ。—

財部大佐は、クロパトキン大将が決戦を求めてハルビンに撤退することを恐れていると言った。

鍋島氏は、日本政府が朝鮮におけるNagemon〔Nagemoirカ〕土地開墾計画に遅れていると述べた。—

大きい本を見よ。

この日記によると、場所は明記されていないものの、蘇峰はミラーからの紹介状を携えてケナンの下を訪れた。その際、蘇峰は七、八年前の欧米旅行について言及したと考えられ、ローマにおいてアメリカ人ジャーナリスト、ウィリアム・J・スティルマン (William J. Stillman) に会い、⁷³ ニューヨーク市ブルックリンのプリマス教会ではライマン・アボット (Lyman Abbott) の説教を聞いたことがあると述べた。アボットは『アウトルック』の編集にあたったことでも知られ、⁷⁴ 同誌から派遣されたケナンにとってその名は身近なものであった。蘇峰はアメリカ旅行の体験も交えながら、ケナンが知るアボットやスティルマンについて、あるいは長年『アウトルック』を購読してきたことを語り、初対面であった両者の距離を縮めようとしたのであろう。⁷⁵ また、話題が日露戦争に入ると、この戦争がロシア人に自由をもたらすことを望むケナンに対して、強国ロシアを南満州から駆逐することで手一杯の日本人、蘇峰は敵国人の生活まで思いをめぐらす余裕はなかったであろう。ロシア人が戦争によって解放されるとしたら、それは副産物にすぎないと答えている。一方、三国干渉の記憶が新しい蘇峰は、西洋列強がリードする国際社会の中で日本が孤立することを恐れ、親日家のケナンをさらに日本側に引きつけてアメリカの対日世論を良好に保つ必要があった。それだけに、かねてから知遇を得ていた松方正義に会わせようと便宜、協力を申し出ている。

先述の蘇峰の回想をくり返すと、かれはケナンなど外国の有力記者を紹介して桂と直接交渉できるようにし、それが英米の世論を日本に傾ける上で多少の効果があったとする。これはロンドン『タイムズ』北京特派員ジョージ・E・モリソン (George Ernest Morrison) との関係を考えてと確かにその通りであり、⁷⁶ そうした蘇峰の活動はさらに明らかにしていく必要がある。ただしケナンについては、現在、管見の及ぶ資料から見る限りでは、蘇峰はケナンの協力者の筆頭というよりもその一人であったという印象が否めない。ケナンは来日前からワシントンの高平小五郎駐米公使と通信し、高平から桂首相、小村寿太郎外相、寺内陸相、山本権兵衛海相、伊藤博文への紹介状を得ていた。⁷⁷ また蘇峰に会う以前から桂首相の秘書中島久万吉からくり返し書簡を受け、蘇峰と会見してから五日後付で中島より、桂伯はあなたとディナーをとることを大変喜んで、外務省の小村〔外相〕、珍田〔捨巳次官〕、鍋島〔桂次郎総務局翻訳課長カ〕も同席の予定との知らせを受けている。⁷⁸ このケナンと桂の対面に蘇峰が関わったかどうかは明らかではない。さらに言論人については、ケナンは蘇峰よりも先にY. Motono (読売新聞)、ヘンリー佐藤 (東京日日新聞) と接触していた。Motonoは戦時中を通じて日本人としてはもっとも頻繁にケナンに手紙を送り、大隈重信へのインタビューの仲介をしている。⁷⁹ 一方、ヘンリー佐藤はケナンに会った際、次のように挨拶している。自

分は桂首相より依頼され、日本が侵略ではなく自衛と満州の門戸開放のために戦っていることを理解してもらうためにやって来た。桂伯はあなたが必要な資料をすべて手に入れるよう望んでいるし、あなたのために各県知事あての私信も書いてあげるだろうと佐藤は説明した。⁸⁰ 桂は蘇峰だけでなく、英語が得意なジャーナリストを動員してケナンのような特派員と接触させ、アメリカ、イギリス人が日本に好意を抱き続けるよう尽力したことがうかがえる。⁸¹ しかしながら、ケナンにおいて蘇峰の存在の比重が低かったかということ、必ずしもそうではない。戦争末期、ケナンは横浜で講演を行うに際してチケットを知人に配ったが、その15人（うち日本人9名）のリストの一人に蘇峰も名を連ねている。⁸² またケナンは蘇峰もしくはその部下に、記事を書くための資料であろう、日本における自殺の統計データを求めており、⁸³ 蘇峰と国民新聞社がケナンの情報源の一つとなっていたことは確かであろう。

明治38年（1905）9月5日、アメリカ、ニューハンプシャー州ポーツマスで日露講和条約が調印されると、条約に不満の一部国民が日比谷焼打事件に代表される暴動を起こした。ロシアと戦う上で国力の限界を感じ取っていた蘇峰と『国民新聞』は、樺太北半や賠償金が得られないからといって屈辱だとするのは間違っている、すでに戦争の目的は達成されたのだと国民を戒めたが、⁸⁴ そうした蘇峰の穏健で公正な主張は強い反発を招き、日比谷公園に集まった群衆が京橋区日吉町にあった国民新聞社を襲撃することになる。9月5日午後一時半ごろ、公園付近にいた数千人が新聞売子の鈴の音につられて「ワッショワッショ」と喚声をあげながら国民新聞社に押し寄せ、「露探新聞を叩き潰せ」「御用新聞社をつぶせ」「売国奴徳富を出せ」などと叫びながら赤レンガ造り二階建ての社屋に石と瓦、燃烧物を投げつけた。二重橋、新富座方面からも人数が加わり、一時、日吉町周辺は暴動者で充満するほどになったという。蘇峰以下の全社員は窓に衝立を立て、目潰しの砂を用意し、鉄棒、木刀、杖、日本刀で武装し、社内に乱入する暴徒と乱闘した。輪転機に砂をかけようとする者には鉛の熱湯で応戦し、ついにピストルで撃たれて負傷する社員も出た。夜八時頃、警官が社員に退去命令を出すと、蘇峰は「死んでも我々はここを退去しない！」と叫び、幹部社員を集めて死守を命ずる。翌9月6日まで数度にわたり襲撃を受けたが、最後は軍隊の出動によって暴徒は退散し、国民新聞社は防衛に成功した。しかも新聞発行を絶やさず、9月6日朝刊に「暴徒撃退始末」を掲げたことはよく知られている。⁸⁵

事件後、『アウトルック』に「日本における平和の剣」と題するケナンの記事が掲載された。⁸⁶ これは、平和の天使は日本にオリーブの枝（和平）だけでなく、剣（暴動事件）をもたらした、苦難の戦争を乗り越えた日本人のプライドと愛国心は樺太北半と賠償金を断念したことに耐え難いものを感じているとして、日本人の見方、感じ方に即して日比谷焼打事件の原因と背景を究明したものである。ケナン自身、人力車に乗って騒動の後半を実地に取材したというだけに、暴動の様子が詳しく描写されており、渋沢栄一、西園寺公望、大隈重信、尾崎行雄、鳩山和夫、谷干城などの意見を紹介しつつ、講和条約に対する日本人の不満がどのようなものであったかを解明している。また、この暴動と敵意が外国人、アメリカに向けられたものではない点を述べ、ロンドンのデモやアメリカのモップと比較しても日本を非文明的ということはできないとして日本人を擁護した。さらにこの記事は『国民新聞』につい

でも言及し、次のように書いている。『国民新聞』は一般に桂内閣の機関とみなされており、ポーツマスに派遣された日本全権の活動を擁護し、戦争の目的は達成されたと主張した。しかし他の朝日、日日、読売、日本、万朝報、報知、二六新報、都の各紙は講和条約を屈辱的だとした。⁸⁷このように述べた上でケナンは、世論と別の発言をした国民新聞社が襲撃される場面を以下のように描く。⁸⁸

…二時前に激昂した暴徒は抑えきれなくなっただけでなく、最悪最低分子の刺激と手引きの下で行動していた。〔日比谷〕公園からあふれ出た群集は公園、銀座間の通りをふさぎ、興奮して政府の言論機関である国民新聞社を襲い始めた。新聞社の編集スタッフは精力的に防衛したが、ついに圧倒され、追い出されてしまい、暴徒は窓を割り、活字ケースをひっくり返し、印刷機を破壊しようとした。

ケナンによると、蘇峰ら社員は懸命に抵抗したが、「圧倒され、追い出されて」しまったという。この一節を読むと、社屋が暴民のなすがままになったという印象を受けるが、これは最後まで社に立てこもった蘇峰たちの実際の行動とは大きく異なる。これを読んだ蘇峰は、ケナンに次の書簡を送った。⁸⁹

【明治38年11月16日 徳富猪一郎からジョージ・ケナン】

November 16, 1905

My dear Mr. Kennan,

Referring to your article entitled "The Sword of Peace in Japan" in the Outlook of October 14, I would like to call your attention to a slight error in the passage in which the attack on the "Kokumin Shimbun" is mentioned.

When we were attacked by the excited mobs, not a single member of our editorial staff left the office. All "made a vigorous defense", but, instead of having been "finally overpowered and driven out", we succeeded in driving away the rioters. Though the rioters rushed into the printing office and damaged one of the machines to some extent, the fact that we were able that very night to publish our paper as usual shows better than anything else how slight the damage was. I may add that some of us, who for some reasons had not come to the office in the morning, hastened there on hearing the news of the riot. For a week following the disturbances, all the members of the editorial staff and business department stayed in the building and kept watch ready for action in case of emergency. Never in my life have I witnessed courage and devotion more beautifully manifested than on the occasion I am writing of.

You will confer on me a great favor, if this fact can be made known to the public through you.

Very truly yours,

I. Tokutomi.

1905年11月16日

親愛なるケナン様

『アウトLOOK』10月14日号に載ったあなたの記事「日本における平和の剣」について、文章中にわずかな誤りがありましたので、ご注意を頂きたいと思いました。それは『国民新聞』への襲撃について書かれた個所です。

興奮した暴徒に攻撃されたとき、私たち編集スタッフでオフィスを去った者はただの一人もいませんでした。[あなたが書いたように]全員が「精力的に防衛」しました。しかし「ついに圧倒され、追い出されてしまった」のではなく、暴徒を追い払うことに成功したのです。かれらは印刷所に突入し、機械の一つにある程度の被害を与えました。しかし私たちはまさにその夜、いつものように新聞を発行することができたのです。そのことが、被害が僅少であったことを何よりもよく物語っています。さらに社員の何人かは訳あってその朝、出社できなかったのですが、暴徒の襲撃を聞いて急いでかけつけたことも付け加えておきましょう。騒ぎから一週間、編集営業あわせた全スタッフは社屋に泊まり、緊急事態に備えて警戒を怠りませんでした。事件の際、社員たちが示した勇気と献身は素晴らしく、これを超えるものを、私は今だかつて見たことがありません。

この事実を人々に知らせて頂ければ大変ありがたく思います。

敬具

I. 徳富

蘇峰にとって、全社一丸となり生命をかけて国民新聞社を守ったにもかかわらず、「社員は暴徒に圧倒され追い出されてしまった」と書かれるのは、到底我慢のできないことであった。そこで英文書簡を作成し、ケナンに反論した。しかし、アメリカの対日世論が良好であることを願う蘇峰の物言いは柔らかであり、あなたの文章のわずかな誤りを直して頂きたい、もし事実を公に知らせて頂ければありがたいというように穏やかなものであった。このように蘇峰は、アメリカから受動的に学ぶだけでなく、積極的に自分をアピールし、相手の誤りを静かに正そうとする態度も一面において持っていたのである。それは自分たちが手塩にかけて育ててきた新聞に強い誇りと愛着を抱いていたからであろう。

なお蘇峰はこの手紙で触れていないが、ケナンの記事はもう一点、現実と乖離する部分があった。ケナンによると、もし日本政府が講和条約に同意した理由をきちんと説明すれば、国内を覆う怒りはなだめられただろう、しかし政府はそれをしない代わりに軍力で抑えることにしたという⁹⁰。確かにケナンの指摘するように、桂内閣が条約締結の背景を十分説明すれば、国民をある程度まで納得させることができたかもしれない。しかしそのときは、日本にこれ以上ロシアと戦う国力が残されていない点を明らかにしなければならぬ。日本が講和を求めたこの核心理由を知らせることなくして、興奮する民衆を真に冷却させることはできなかったであろう。しかしながら、それは無理な注文であった。講和会議中に最高機密である日本の継戦能力を発表すれば、戦いに余力を残すロシアがそれに乗じることは自明である。また会議直後であっても、ロシアの復讐戦を恐れる日本指導層にとって、それはできないことであっただろう。もちろん講和会議以後、政府が真相を公表しないまま、日本陸海

軍の無敵神話を野放しにし、後世に多大の禍根を残したことはよく知られる通りである。したがって時期を見て、国民に日露戦争の真実を知らせることは不可欠であったが、日比谷焼打事件の前後、それは不可能であったといわざるを得ない。桂首相から絶えず情報を入手し、日本の国力の限界を感じていた蘇峰は、その点でケナンの意見に承服できなかったはずである。焼打事件直後、蘇峰は弟の徳富蘆花に「日本の内情は可成の切迫だったのだよ。外面は、もう一押しで向うをやっつけられるように見えたが、実際はそう行ける状態ではなかったのだ」と語った。それに対して蘆花が「そうなら国民に事情を知らせて諒解させれば、あんな騒ぎはなしにすんだでしょうに」と答えると、蘇峰は「お前、そこが策戦だよ。あのくらい騒がせておいて、平気な顔で談判するのも立派な方法じゃないか」と述べたという⁹²。このように裏の事情を知る蘇峰にとって、ケナンの見方は現実を知らない者のそれに見えたであろうが、これについては触れなかった。ただし、ケナンは後に自らの誤りを悟ることになる。明治39年（1906）6月に帰国するまでの間に、ケナンは先の記事を読んだシオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt）大統領から、あなたは現場にいるのに日本が軍事力を使い果たして和平交渉を始めたことにまだ気づいていないと手紙でたしなめられ、さらに日本の官僚から日本軍の疲弊状況を知らされ、大統領の叱責が正しいことを知らされるのである⁹³。

以上のように蘇峰とケナンには、国家の命運をかけた戦争に直面した者とそうでない者との違いがあった。しかしながら、ジャーナリストであった両者は数々の類似点をもっている。例えば、二人とも青年時代にエリートコースからはずれた独自の道を歩み、大江義塾での独学やシベリアでの調査を重ねつつ成功をめざして這い上がった。ケナンはその過程で自己信頼（self-reliance）の意識を深め、たとえ正規の学校教育から外れても、ウォルター・バジヨット（Walter Bagehot）、ジョン・S・ミル（John Stuart Mill）、ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）等の読書に余念がなかったが、これは蘇峰も同様であった。やがて影響力のある言論人となった二人は、国家の最高指導者から世論形成家としての役割を期待される。ローズヴェルト大統領は世論を作り出す上でジャーナリストからのサポートを求めており、記者の中ではとくにケナンと親密になり、重要問題を通信し合った。戦時中のケナンは、桂首相に対して大統領の密使として働いたという⁹⁵。他方、桂と密接な蘇峰が、国内と欧米の世論工作を依頼されたことは既に記した通りである。両者はそれぞれ別の文化を背景とする外面的には異なった人間であったが、その内面には意外な共通点が見られたのである。

日米それぞれの言論界でオピニオン・リーダーとして活躍した二人は、明治末年から大正期にかけても時おり手紙を交わした。ケナンはもともと植物に関心があっただけに、避暑地ノヴァスコシアの海岸で拾った海草を押し葉にしたグリーティング・カード、あるいは処女作『シベリアのテント生活』の新版を蘇峰に送った⁹⁶。蘇峰は同書の表紙見返しに「是剣南先生所贈須珍重護持也」と丁寧⁹⁷に記した。「剣南先生」の文字に、ケナンに対する敬愛の念が込められている。

おわりに

本稿では書簡を手がかりとして三名のアメリカ人、すなわちゴドキン、ノートン、ケナンと蘇峰の交流を考察した。結論として以下の三点が指摘できる。

第一に、明治20年、蘇峰はゴドキンの『ネイション』をヒントの一つに『国民之友』を創刊したが、26年にゴドキンへ手紙を送り、『国民之友』を献呈した。そこにはジャーナリストとして自己実現の目標となった『ネイション』、ゴドキンに対する蘇峰の敬意が表れていた。

第二に、明治30年、アメリカを訪れた蘇峰はノートンと会見した。蘇峰はノートンにゆかしい印象を受け、以後くり返し手紙を送り、理想をもつ飾り気のないピューリタンに敬慕の念を表し続けた。他方、ノートンは蘇峰を通じて日本人の存在を意識し、その知性を感じる半面、一種のカルチャー・ショックを受けた。

第三に、明治37年、日露戦争の最中に来日したケナンに蘇峰は協力を申し出た。また日比谷焼打事件に関するケナンの記事の誤りを正した。他方、ケナンは蘇峰側に資料の入手を依頼する。蘇峰にとってケナンは帝政ロシアと戦う上で好ましい親日家であった。

以上を通じて、明治20年から30年代の蘇峰が、三名のアメリカ人に次のような印象を受けていることがわかる。すなわち、自分の可能性を開く一助をなした先達、理想を抱き続けるピューリタン的人格者、日露戦争時の貴重な親日家である。この三人のいずれに対しても蘇峰は好意を抱いた。後年、日米戦争が始まる直前に蘇峰は次のように洩らしている。「私はアメリカ嫌ひでもなければ、イギリス嫌ひでもありません。…なんといつても、私はやはりアメリカが好き、イギリスが好きであつた。⁹⁸」戦時下、米英撃滅を唱えることになる蘇峰の心の奥底には、根強いアメリカへの愛着があつた。⁹⁹ この愛情がどこに由来するかというと、その源流の一つとして、本稿で述べた明治期におけるアメリカ人との交流をあげることができよう。

- 1 蘇峰（本名猪一郎）の経歴については、和田守編「年譜」植手通有篇『明治文学全集34 徳富蘇峰集』（筑摩書房、昭和49年）所収がもっとも詳細であり、主としてこれを参照した。
- 2 成篁堂文庫に所蔵される洋書は、丸山昭二郎監修、お茶の水図書館編『お茶の水図書館蔵成篁堂文庫洋書目録』（石川文化事業財団 お茶の水図書館、昭和61年）にリストアップされている。
- 3 熊本洋学校時代については、篠田一人監修、同志社大学人文科学研究所研究叢書VII『熊本バンド研究 日本プロテスタンティズムの源流と展開』（みすず書房、1965年初版、1997年新装版）、田中啓介編『熊本英学史』（本邦書籍、昭和60年）、フレッド・G・ノートヘルファー著、飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ L.L.ジェーンズ大尉と日本』（法政大学出版局、1991年）、田中啓介『文学の旅 ジェーンズ探しの旅』（熊本日日新聞情報文化センター、平成12年）などが参考となる。同志社時代の蘇峰については、伊藤彌彦『のびやかにかたる 新島襄と明治の書生』（晃洋書房、1999年）に加えて最近、本井康弘『新島襄と徳富蘇峰—熊本バンド、福沢諭吉、中江兆民をめぐって—』（晃洋書房、2002年）が出版された。
- 4 財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団編『財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵 徳富蘇峰宛書簡目録』（徳富蘇峰記念館、1995年）404-412頁「外国人からの書簡」。その中にはウィリアム・H・タフト（William Howard Taft）大統領から送られたカードも含まれている。

- 5 杉井六郎『徳富蘇峰の研究』（法政大学出版局、1977年）の第六章「蘇峰の欧米旅行」。安藤英男『蘇峰徳富猪一郎』（近藤出版社、昭和59年）109-110頁、『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和10年第五十版）327頁、早川喜代次『徳富蘇峰』（徳富蘇峰伝記編纂会、昭和54年第二版）132-134頁。
- 6 蘇峰とアメリカ人の関係をテーマにしたものではないが、書簡を用いて蘇峰とその周辺の日本人の交遊を
探る先行論考として、高野静子『蘇峰とその時代—よせられた書簡から』（中央公論社、昭和63年）、『続
蘇峰とその時代—小伝 鬼才の書誌学者 島田翰 他—』（徳富蘇峰記念館、平成10年）があり、さらに同氏が
学芸総合誌『環』に創刊号（2000年4月）より連載している「徳富蘇峰宛書簡」がある。
- 7 復刻版『国民之友』第1巻（明治文献、昭和41年）所収の「嗟呼国民之友生れたり」及び巻頭言（『国民之
友』第1号、明治20年2月）。
- 8 同志社大学人文科学研究所編、同志社大学人文科学研究所研究叢書VIII『民友社の研究』（雄山閣出版、
1977年）、『民友社思想文学叢書』全7冊（三一書房、1983-86年）など民友社や蘇峰に関する研究はこの時
期に集中している。
- 9 前掲、『蘇峰自伝』190頁。
- 10 同上、223頁。
- 11 ラーネッドは同志社の「書籍学器ノ買入レ」を担当しており（同志社五十年史編纂委員会編『同志社五十
年史』、カニヤ書店、昭和5年7月、202頁）、教科書その他の洋書はかれがアメリカから取り寄せ、学生は
代金と交換に現物を受け取っていた（住谷悦治『ラーネッド博士伝一人と思想』、未来社、1973年、74頁
に引用された安部磯雄の回想）。しかも、ある生徒が一冊の本を注文すると、ラーネッドはそれと対照し
て読むべき別の本を贈呈したこともあったという（松浦政泰『同志社ローマンス』、警醒社書店、大正7年
10月、397頁）。蘇峰はラーネッドの授業に「心から愉快を以て出席」しており（前掲、住谷『ラーネッド
博士伝』58頁に引用された蘇峰の回想）、同志社退学後は、なおラーネッドを窓口としつつ、『ネイション』
を愛読した。
- 12 William M. Armstrong, *E.L. Godkin and American Foreign Policy 1865-1900* (New York: Bookman
Associates, 1957; reprint, Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1977), 197 (頁は復刻版)。
- 13 Armstrong, *E.L. Godkin and American Foreign Policy*; William M. Armstrong, *E.L. Godkin: A
Biography* (Albany, New York: State University of New York Press, 1978); *American National
Biography*, 1999 ed., s.v. "Godkin, Edwin Lawrence," by Richard F. Hixson. 以下、ゴドキンの
経歴その他かれに関する詳細はこれらを参照、引用した。
- 14 母親はクロムウェル時代にイングランドから南アイルランドに移住した人々の子孫であった。
- 15 拙稿「徳富蘇峰とアメリカン・デモクラシー—自由民権運動後半期を中心に—」『法学研究』74巻7号（平
成13年7月）86-88頁を参照のこと。
- 16 そうした中でニューヨークの名士と知り合うようになったゴドキンは、やがて支援者からイエール大学総
長シオドア・D・ウールジー (Theodore Dwight Woolsey) を紹介され、ニューヘイヴンのウールジー邸で
出会った財産家の娘フランシス・E・フット (Frances Elizabeth Foote) と1859年に結婚し、社会的地位
と経済的安定を得る。フランシスのいところには『アンクル・トム的小屋』(Uncle Tom's Cabin) を出版し
て間もないハリエット・B・ストー夫人 (Harriet Beecher Stowe) と雄弁家の牧師で奴隷制廃止論者として
も知られるヘンリー・W・ビーチャー (Henry Ward Beecher) の姉弟がいた。

- 17 ギャリソンは奴隷解放運動の指導者として有名なウィリアム・L・ギャリソン (William Lloyd Garrison) の三男であった。
- 18 *Life and Letters of Edwin Lawrence Godkin*, vol.1, ed. Rollo Ogden (New York and London: The Macmillan Co.,1907), 237-8; Gustav Pollak, *Fifty Years of American Idealism: The New York Nation 1865-1915* (Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1915), 7-8.
- 19 その他、政治学者フランシス・リーバー (Francis Lieber)、あるいはジョン・フィスク (John Fiske) など19世紀アメリカの主な歴史研究者の大半が寄稿し、海外からは前述のブライスが英国政治、ダイシーやゴールドウィン・スミス (Goldwin Smith) が国際問題について記事を送った。
- 20 前掲、住谷『ラーネッド博士伝』7、210、690頁。
- 21 Armstrong, *E.L. Godkin*, 128. ゴドキン夫妻は結婚後しばらくの間、イエール大学のあるニューヘイヴンに住んでいた。またゴドキンはイエール大学で開かれたウールジーを座長とする行政事務改革の会議でスピーチをしたこともある。Ibid.,128.
- 22 ちなみにイエール大学の学者W.D.ホイットニー (William Dwight Whitney) はしばしば『ネイション』に様々なトピックを執筆していた。Armstrong, *E.L. Godkin*, 103. このホイットニーはラーネッドの叔父であり、「イエール大学、ホイットニー教授⇒ラーネッド⇒蘇峰、『ネイション』」の関係も可能性として残される。
- 23 ただし蘇峰は後に自由貿易主義を捨て去ることになる。梶田明宏「徳富蘇峰における言論と政治—思想と行動の原型をめぐって—」福地惇、佐々木隆編『明治日本の政治家群像』(吉川弘文館、平成5年) 391頁。
- 24 I. Tokutomi to E.L. Godkin, 4 July 1893, Edwin Lawrence Godkin Papers, bMS Am 1083 (1005), Houghton Library, Harvard University, Cambridge, Mass.
- 25 既に触れたように『ネイション』は「進歩と文明の成果を広めていく」ことを目的に謳ったが、蘇峰も『国民之友』で「日米同盟」と題する論説を掲げ、日本とアメリカはどちらも将来の太平洋の女王であり、両国が轡を並べて「文明の前途」に馳駆することを願うとしている。前掲、早川『徳富蘇峰』71頁、復刻版『国民之友』第8巻(明治文献、昭和41年)所収の「日米同盟」(『国民之友』第116号、明治24年4月23日)、国民叢書第十冊『経世小策 五巻』(民友社、明治29年7月) 247-248頁。
- 26 ゴドキンの死後、蘇峰が後妻のキャサリン (Katharine Godkin) に宛てた書簡によると、蘇峰はゴドキンから何通か手紙を受け取っており、ゴドキンが亡くなった際、故人に敬意を表するため新聞紙上でその手紙を紹介しようと思い、探してみたが、ついに見つからなかったとある。I. Tokutomi to Katharine Godkin, 24 July 1903, Godkin Papers, bMS Am 1083 (1471).
- 27 Armstrong, *E.L. Godkin*, 188; Armstrong, *E.L. Godkin and American Foreign Policy*, 191.
- 28 Armstrong, *E.L. Godkin and American Foreign Policy*, 120.
- 29 Ibid., 149-50.
- 30 Armstrong, *E.L. Godkin*, 172.
- 31 Ibid., 59.
- 32 前掲、杉井『徳富蘇峰の研究』380頁。
- 33 前掲、『蘇峰自伝』327頁、早川『徳富蘇峰』132頁、徳富蘇峰『読書法』(講談社学術文庫、昭和56年) 82-83頁。文献の多くがノートンとの会見場所はボストンとしているが、正確には後述するようにボストン隣のケンブリッジであった。

- 34 Kermit Vanderbilt, *Charles Eliot Norton: Apostle of Culture in a Democracy* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1959); *American National Biography*, 1999 ed., s.v. "Norton, Charles Eliot," by James Turner. 以下、ノートンの経歴その他かれに関する詳細はこれらを参照、引用した。
- 35 前掲、早川『徳富蘇峰』132頁に、ノートンが「一八九七年五月二十六日清蔭岡に於て」とサインした書物をこのとき蘇峰に贈呈したことが記されており、ここから会見の年日がわかる。ここでいう「清蔭岡」がシェイディ・ヒルである。ノートンからの献呈本については後述する。とくに註38を参照のこと。なお、ノートンに面会するにあたり蘇峰は秘書役の深井英五を同伴したと考えられる。
- 36 津奈木町誌編集委員会編『津奈木町誌』上巻（津奈木町、平成5年）の第4章「近世」を参照のこと。ちなみに同書は上巻のみで下巻は刊行されていない。
- 37 蘇峰令孫の徳富敬太郎氏によると、蘇峰は徳富家が武士の家柄であることに誇りをもち、同家が島原の乱以来の歴史をもつ点を家族によく話していたという（平成14年10月4日、電話によるヒアリング）。また後述するようにノートンは米西戦争に反対して中傷迫害を受け、蘇峰は日露戦争直後、ポーツマス講和条約に賛成して国民新聞社の焼き討ちを受けたが、ともに初志を曲げず、世論と戦う勇気を示している。なおリーダーであった二人は、デモクラシーをめぐる類似の悩みをもつことになる。ノートンは蘇峰と会う前年、古い伝統と文化が民主主義社会の下で新しい無作法、社会的責任感のなさ、モラルの低下という危機にさらされていると憂えたが、とくに大正以降、アメリカに遅れて工業化とデモクラシー、大衆社会の到来を体験した蘇峰は、過去の日本の伝統的な道徳秩序や義務観念がアメリカン・デモクラシーによって破壊されていると頭を悩ませることになる。しかも蘇峰の場合、それは単に日本の伝統に対するデモクラシーの挑戦というだけでなく、デモクラシーをもたらずアメリカの挑戦とも受け取られたのである。拙著『近代日本人のアメリカ観 日露戦争以後を中心に』（慶應義塾大学出版会、1999年）204-205頁を参照。
- 38 前掲、早川『徳富蘇峰』132頁。この二冊は現在、財団法人石川文化事業財団・お茶の水図書館成篁堂文庫に所蔵されており、*Reminiscences by Thomas Carlyle*, vol. 1, 2, ed. Charles Eliot Norton (London: Macmillan and Co., 1887)の第1巻と *Correspondence Between Goethe and Carlyle*, ed. Charles Eliot Norton (London: Macmillan and Co., 1887)の見開きにはそれぞれノートンの署名が次のように入っている（前書が左、後書が右）。

Mr. I. Tokutomi
 With the kind regards of
C.E. Norton.
 Shady Hill, Cambridge, Mass.
 26 May, 1897.

Mr. I. Tokutomi,
 (With pleasant recollections
 of his visit,)
 from
C.E. Norton.
 Shady Hill.
 26 May, 1897.

右側は早川『徳富蘇峰』132頁の記述、すなわちノートンは「貴下の訪問に対する愉快なる記憶を以って徳富君に呈す一八九七年五月二十六日清蔭岡に於て」と署名したという個所と一致する。なおどちらも蘇峰が中を読んだ形跡はあまり見られない。一方、蘇峰は訪問時に「チャーミングな小さいねずみ」の人形

をノートンにプレゼントした。C.E. Norton to Tokutomi, 19 March 1898. 財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団・徳富蘇峰記念館（神奈川県二宮町）所蔵。ノートンはそのねずみを自分のテーブルの上に置き、そのときの思い出は生き続けていると書簡に記している。ちなみに明治30年は酉年であるから、ねずみといっても干支にちなんだ置物というわけではない。

- 39 草野茂松、並木仙太郎編『蘇峰文選』（民友社、大正5年2月第7版）所収の「ノルトン教授」1060-1065頁。もともと明治41年12月、『国民新聞』に掲載された追悼文である。
- 40 後述の1899年1月20日付ノートンの蘇峰宛て書簡から明らかとなる
- 41 I. Tokutomi and Y. Fukai to Charles Norton, undated, Charles Eliot Norton Papers, bMS Am 1088 (7418), Houghton Library, Harvard University, Cambridge, Mass. 封筒に1897年12月23日東京消印が押され、コメントは型通りのクリスマスの挨拶である。『『国民之友』のイラストレーター』とされた人物による花の絵が描かれている。
- 42 C.E. Norton to Tokutomi, 19 March, 1898. 徳富蘇峰記念館所蔵。この書簡によると蘇峰はノートンにチャイルド教授に関する“The Nation”の新聞記事を同封してきたという。チャイルド教授とはハーヴァード大学修辞学教授でノートンの同僚かつ友人であったフランシス・チャイルド (Francis Child) であろう。また “The Nation” は文字通りの『ネイション』ではなく『国民新聞』ではないだろうか。ノートンは手紙の中で、受け取った新聞はハーヴァード大学の英語英文学の教員たちに預けられ、チャイルドの名誉に献じられた図書館に保存されるだろうと答えている。ここでいう図書館とは、同大学英語学部のChild Memorial Libraryであると考えられる。
- 43 I. Tokutomi and Y. Fukai to Charles Norton, 25 December 1898, Norton Papers, bMS Am 1088 (7419). 前年同様、型通りの挨拶と同じ画家による朝顔の絵が書かれている。
- 44 C.E. Norton to I. Tokutomi, 20 January 1899. 徳富蘇峰記念館所蔵。
- 45 この礼状の現物は管見の及ぶ限りでは見当たらない。
- 46 前掲、「ノルトン教授」1062頁。
- 47 前掲、拙著『近代日本人のアメリカ観』93頁を参照のこと。
- 48 I. Tokutomi and Y. Fukai to Charles Norton, undated, Norton Papers, bMS Am 1088 (7420). 封筒に1900年1月2〔カ〕日の東京消印が押され、前年同様、型通りの挨拶と同じ画家による花の絵が書かれている。
- 49 C.E. Norton to I. Tokutomi, 15 May 1901. 徳富蘇峰記念館所蔵。この書簡によると蘇峰が送った『国民新聞』についてノートンは日本語のため内容はわからないが、体裁がアメリカのそれよりも洗練されていると誉め、また蘇峰が「恐らく一年前」に小さな少女の写真を送ってくれたが、その子が元気であることを望むとしている。この少女とは明治33年の時点で13歳の長女逸子、5歳の次女孝子、2歳の三女久子が考えられるが、後述する34年10月20日付ノートンから蘇峰宛て書簡に蘇峰の覚書きが付けられており、そこに写真と関連して「小生の娘ハ既ニ学校ニ通学」と記されているから、このとき学齢期にあった長女逸子の写真であろうか。次女孝子は明治34年10月の時点でようやく6歳になったばかりであり、学齢期に達していなかった。しかしこの覚書には年月が記されておらず、時を経て付された場合も考えられ、しかも写真は「小さな少女」であるから、次女孝子の可能性もある。
- 50 C.E. Norton to S.G. Ward, 7 October 1901, *Letters of Charles Eliot Norton*, vol.2, eds. Sara

Norton and DeWolfe Howe (Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1913), 311-2. 蘇峰は同書全二冊を大正3年(1914)3月、丸善から購入し、第二巻の自分について書かれた個所に紫色の鉛筆でアンダーラインを引いている。お茶の水図書館成篁堂文庫の蘇峰旧蔵書を参照。

- 51 Vanderbilt, Norton, 84.
- 52 C.E. Norton to I. Tokutomi, 20 October 1901. 徳富蘇峰記念館所蔵。
- 53 この書簡には蘇峰の覚書きが付けられており、そこには『書簡』五冊と自分の写真をノートンに送ったとある。
- 54 一方、蘇峰はその原書をノートンから献呈されており、蘇峰旧蔵書の表紙見返しには「編者ノートン教授の特ニ郵贈スル所 称賞す可き也 蘇峰生記」とある。それ以外に本文中に書き込みはない。 *Letters from Ralph Waldo Emerson to a Friend 1838-1853*, ed. Charles Eliot Norton (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Co., 1899). お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵。またその後、蘇峰は明治37年(1904)6月にノートンから、Charles Eliot Norton, *The Poet Gray as a Naturalist* (Boston: Charles E. Goodspeed, 1903)の寄贈を受け、その旨を表紙見開きに記している。同書は読まれた形跡がないが、中表紙には六種類の蔵書印が押され、愛蔵を物語っている。お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵。
- 55 Vanderbilt, Norton, 221.
- 56 C.E. Norton to Nariaki Kozaki, 10 February 1904, *Letters of Charles Eliot Norton*, vol.2, 337.
- 57 前掲、「ノートン教授」1064頁。
- 58 同上、1061、1064頁。
- 59 これは後述する米公使館日本語通訳ランスフォード・S・ミラーと考えられ、「書記官」の肩書は「通訳」の誤りではないかと思われる。
- 60 前掲、早川『徳富蘇峰』172-173頁、『蘇峰自伝』389-390、393頁。
- 61 Frederick F. Travis, *George Kennan and the American-Russian Relationship 1865-1924* (Athens: Ohio University Press, 1990); *American National Biography*, 1999 ed., s.v. "Kennan, George," by Frederick F. Travis. 以下、ケナンの経歴その他かれに関する詳細はこれらを参照、引用した。
- 62 Travis, *George Kennan*, 179.
- 63 なおケナンは講演だけでは生活できないため、明治10年(1877)よりニューヨーク連合通信に入り、報道と編集に携わっていた。
- 64 前掲、拙稿「徳富蘇峰とアメリカン・デモクラシー」の第一章を参照のこと。
- 65 結局、ケナンのロシア旅行は、明治34年(1901)の最終訪問まで合計五回を数えることになる。
- 66 See, Travis, *George Kennan*, 179-80.
- 67 なおケナンの活動は講演だけにとどまらず、明治24年(1891)に刊行した『シベリアと流刑制度』(*Siberia and the Exile System*)は千部を超えなかったが権威ある書となり、ヨーロッパの各国語に訳されたほか海賊版も出ており、ロシア国内でもひそかに読まれ、後年ロシア革命を達成する新しい世代の人々にも刺激を与えることになった。ソ連元首ミハイル・I・カリニン(Mikhail Ivanovich Kalinin)は自分の世代にとって同書はバイブルだったと語っている。Travis, *George Kennan*, 228-31, 205. ロシア国内に不安定要因を作り出す一助をなしたケナンは、その点でもやがてロシアと戦うことになる日本に間接的な貢献をしたといえよう。

- 68 Ibid.,263. ケナンはやがてロシア自由の友協会 (The Society of Friends of Russian Freedom) アメリカ支部が派遣したニコラス・ラッセル (Nicholas Russel) に後事を託したため、工作はケナンとラッセルの二人によるものといえる。
- 69 前掲、拙著『近代日本人のアメリカ観』32頁。
- 70 R.S. Miller to Kennan, 3 August 1904, George Kennan Papers, Manuscript Division, Library of Congress, Washington, D.C., box 2, folder: 1904.
- 71 George Kennan Diary (Japan No2 Japan, Korea, Manshu maru and Port Arthur May 2 To Apl 15. 04-5), 357-8, 5 August 1904, Kennan Papers, box 22.
- 72 財部彪は当時、大本営参謀、海軍中佐であり大佐ではない。大佐になったのは明治38年1月であった。秦郁彦『日本陸海軍総合辞典』(東京大学出版会、1991年) 208頁、財部の項。
- 73 ロンドン『タイムズ』(Times) 特派員のステイルマンに蘇峰が会ったことは、前掲、『蘇峰自伝』324頁、徳富『読書法』82頁にも記されている。
- 74 Travis, *George Kennan*, 307.
- 75 アボットは、プリマス教会の牧師で有名な説教家であったヘンリー・W・ビーチャーの説教集をいくつか編集しており、その一つ『朝夕工課』(*Morning and Evening Exercises*) を少年時代の蘇峰は愛読していた。花立三郎、杉井六郎、和田守編『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』(三一書房、1978年) 15-35頁も参照。この点については稿を改めて論じる予定である。蘇峰はこの書を思い出しながらビーチャーゆかりの教会を訪れ、編者アボットのスピーチを聞いたのだろうか。またビーチャーはアボットを深く信頼し、自分が編集してきた宗教誌『クリスチャン・ユニオン』(*Christian Union*) をかれに任せましたが、同誌が後に『アウトLOOK』となり、アボットはその編集にあたることになった。Clifford E. Clark, Jr., *Henry Ward Beecher: Spokesman for a Middle-Class America* (Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1978), 244; *American National Biography*, 1999 ed., s.v. "Beecher, Henry Ward," by Clifford E. Clark; Travis, *George Kennan*, 307.
- 76 ウッドハウス暎子『日露戦争を演出した男 モリソン』上、下巻 (東洋経済新報社、1988年) を参照のこと。
- 77 Kennan Diary (Japan No1 Midway Island 3/28, 04 To Yokohama 5/28/04), 177, Add. Letters of Introduction, Kennan Papers, box 22.
- 78 K. Nakashima to Kennan, 10 August 1904, Kennan Papers, box 2, folder: 1904.
- 79 Y. Motono to Kennan, 4 October 1904, Kennan Papers, box 2, folder: 1904.
- 80 Kennan Diary (Japan No1), 81, 24 May 1904, Kennan Papers, box 22.
- 81 ただしケナンは後に、英語で自由に話せる日本人の友人は数名しかいない、そのほとんどは注意深く情報を洩らさないようにしているところぼすことになる。Kennan to Lawrence Abbott, 27 April 1904, Kennan Papers, box 7, folder: 1905-07.
- 82 明治38年3月30日の講演から五日前にケナンはチケットを送った。それをチェックしたメモ書きによると、グリスコム公使の三枚には及ばないが、蘇峰はMotonoやミラーと同じく二枚の割当を得ている。Kennan Diary (Japan No3 Japan & Korea May 29. 05 To Aug 4. 05.), 11, Kennan Papers, box 22.
- 83 G. Date to Kennan, 15 March 1906, Kennan Papers, box3, folder:1906-09. 国民新聞社の用箋に社員伊達源一郎が記したもので、ケナンに依頼された日本人の自殺の統計表二点を同封したことが記されてい

- る。手紙の日付から推して、ケナンの要請は日露戦争後になされたものと考えられる。その他にケナンは『アウトルック』社主のローレンス・F・アボット (Lawrence F. Abbott) にあてた手紙の中で同志社について説明した際、同校に関心をもつ自分の知人の一人として「『国民新聞』編集者兼社主の徳富氏」をあげており、蘇峰の名はケナンの記憶に確実に留まっていた。Kennan to Abbott, 18 April 1905, Kennan Papers, box7, folder: 1905-07.
- 84 拙著、『近代日本人のアメリカ観』39-40頁。
- 85 前掲、早川『徳富蘇峰』181-197頁、司法省刑事局『思想研究資料』特集第50号「所謂日比谷焼打事件の研究」(昭和14年2月)57-58頁。早川『徳富蘇峰』は、国民新聞社襲撃を扇動したのは『二六新報』や『万朝報』の関係者であることを示唆している。
- 86 George Kennan, "The Sword of Peace in Japan," *Outlook*, 14 October 1905, 357-65.
- 87 *Ibid.*, 359.
- 88 *Ibid.*, 361.
- 89 I. Tokutomi to Kennan, 16 November 1905, Kennan Papers, box3, folder:1905. 本稿で扱っている蘇峰の書簡はいずれも手書きであるが、これのみタイプ打ちされ、最後に蘇峰の署名が入っている。
- 90 Kennan, "The Sword of Peace in Japan", 360. もっともケナンは別の個所で、現内閣が戦争を遂行し、成功を収めたことを日本の報道機関と国民は忘れてはならないとしており、日本政府を厳しく糾弾したわけではなかった。*Ibid.*, 364.
- 91 戦争の最末期、外債募集のためニューヨークに滞在中の日本銀行秘書役、深井英五に蘇峰は「媾和も出来レハ仕合ニ候。日本も強かり候得共、戦争ニ対スル総ての力は殆んど出し尽し申候。此上ハ兵か足らぬ也。金ハ借ル事か出来ルモ兵ノ不足ニハ閉口也」と洩らしている。前掲、早川『徳富蘇峰』180頁、拙著『近代日本人のアメリカ観』7頁。
- 92 前掲、早川『徳富蘇峰』202頁。
- 93 Travis, *George Kennan*, 265-6.
- 94 *Ibid.*, 19-20, 49.
- 95 *Ibid.*, 265.
- 96 George Kennan, *Tent Life in Siberia: A New Account of an Old Undertaking Adventures among the Koraks and Other Tribes in Kamchatka and Northern Asia*(New York and London: G.P. Putnam's Sons, 1910). お茶の水図書館成笈堂文庫所蔵。同書は読んだ形跡が見られないが、ケナンからのグリーティング・カードが二通挟んであり (Kennan to Tokutomi, December 1910; 28 November 1914)、どちらも海草が押し葉にされている。またニューヨークでのケナンの講演会パンフレット (それを入れた封筒の消印から1913年12月に投函され、翌年1月に蘇峰の下へ届いたと考えられる) も書中に挿入されている。さらにケナンが亡くなった直後、『アウトルック』に掲載された記事を、蘇峰は切り抜いて裏表紙見返しに貼付している。"George Kennan," *Outlook*, 21 May 1924, 90-2. その他に、徳富蘇峰記念館にはケナンのグリーティング・カード (1921年付) が一通保存されているが、これには本人のサインが記されただけである。
- 97 正確には「明治四十又三年五月十八日落手此是劍南先生所贈須珍重護持也 蘇峯学人」とある。
- 98 拙著、『近代日本人のアメリカ観』170-171頁。
- 99 日米戦争中の蘇峰の発言に親米的なものは見当たらない。しかし、蘇峰は心の真底からアメリカを憎悪し

ていなかったのではないか。なぜならば、蘇峰のアメリカに対する怒りは書物や新聞の報道から触発されたもので、それは蘇峰という知識人が頭の中で考えた結果、心に湧き起こったものであり、実体験に即して肌身で感じ取ったものとは言い難いからである。昭和戦前、戦中期の日本人が必ずしもアメリカを心底から憎んでいなかった点については、Ben-Ami Shillony, "Friend or Foe: The Ambivalent Images of the U.S. and China in Wartime Japan," in *The Ambivalence of Nationalism: Modern Japan Between East and West*, eds. James W. White, Michio Umegaki, and Thomas R.H. Havens (Lanham, Maryland: University Press of America, 1990); 岡崎久彦、阿川尚之『対論：日本とアメリカ』（廣済堂出版、2002年）の第四章「日米戦争はなぜ起こったのか」が示唆に富む。終戦後、蘇峰は極東国際軍事裁判を批判しつつも、アメリカに好意的な発言を復活させるが、それは戦時中に意識の底に潜航していたものが、再び顕在意識に浮上したものと考えられる。戦後、蘇峰は日本とアメリカが明治期の伝統的な協力関係に戻ることを訴えるとともに、次のように述べている。「元来予は米国を以て、不倶戴天の敵と考へたることは、戦争中でもなかつた。予は元来明治三十年以降も、我国が日英同盟、日米親善の線に沿うて行かんことを希望したるものである。然るに事志と違ひ、遂に日本は所謂ABCDの包圍攻撃の中に窒息して死するか、然らざれば進んで其の包圍を打破するかの死生巖頭に立ち、寧ろ速に戦ひ、速に和するの他に途なきを認めたるものである」（徳富猪一郎『勝利者の悲哀』大日本雄弁会講談社、昭和27年、128頁、前書3頁）。壮年時までにアメリカへの愛着を固めた蘇峰は、それを根底から捨て去ることはなかつた。

【付記】 本稿は、平成13年度日本学術振興会科学研究費補助金・奨励研究（A）「日露戦争以前における徳富蘇峰のアメリカ観—その形成と展開—」の一部である。